

石見学ブックレット2

中世の港町・浜田

— 港湾都市浜田の成立と日本海水運に果たした役割 —

浜田市教育委員会

発刊にあたって

浜田において、人々が集う町＝都市というものが「いつ」「どのような理由」によって成立し、そして発展したのでしょうか。大変大きな課題ではありますが、これを具体的に明らかにすることによって、私たちは「浜田とはどのような特徴をもつ地域なのか」ということを理解することにつながるものと考えます。

本書は、まさにそのことを中世の日本海水運という具体的な視点を通して、私たちに気付かせてくれます。そして、浜田と世界とが海によって、いかに深く関わっているのかということ、改めてご理解いただけたと思います。

本書の内容は平成10年度に開催しました石見学講座「浜田から見た中世石見の海運」をもとに、ご講演いただきました井上寛司先生に快くご執筆いただきました。心よりお礼申し上げます。

平成13年3月

浜田市教育委員会
教育長 竹 中 弘 忠

目 次

I . 中世の浜田	1
(1) 中世の世界と日本	1
(2) 中世の浜田地域	6
II . 西日本海地域の水運と浜田	1 1
(1) 西日本海水運の成立と古市遺跡	1 1
(2) 周布氏の対朝鮮交易	2 3
III . 港湾都市・浜田と東アジア世界	3 7
(1) 港湾都市・浜田の成立と発展	3 7
(2) 石見銀山の開発と東アジア世界構造の転換	5 2
IV . 「世界の中の浜田」・「浜田の中の世界」	5 8

—むすびにかえて—

I. 中世の浜田

(1) 中世の世界と日本

これからお話しする「中世」という時代は、日本では 11 世紀末から 16 世紀末までのおよそ 500 年間のことをいいます。衣の上に鎧よろいをまとった「僧兵」や源氏・平氏げんじ へいしなどの武士が登場し、華々はなばなしい活動を始めた平安時代の末期から、鎌倉・南北朝・室町時代を経て戦国時代の末期に至る時代、豊臣秀吉とよとみひでよしの天下統一をもって終わりを告げた時代のことです。

この時代の日本の特徴を大雑把おおざっぱに整理すると、次のような点を指摘することができます。

まず第 1 は、それまでの天皇を中心とした一元的で中央集権的・官僚制的な支配の体制（古代律令制国家）が崩れ、代わって公家・寺社・武家などの領主たちが、それぞれ自らの実力でもって全国の土地や民衆を支配する体制が成立したことです。その支配の単位が荘園しょうえんや国衙領こくが（あるいは公領こうりょう）と呼ばれました。またこれにともなって、各国レベルの地域の支配権力（国衙・守護しゅごなど）の自立化が進み、依然いぜんとして天皇が国王として存在し中央集権的ではありますが、しかし実際には極めて多元的で分散的な体制が成立することとなりました。こうした中世日本の国家体制を権門体制国家けんもんたいせいといいます。

時代	西暦	年号	浜田や石見の主な出来事
平安	1051		
	1083		
	1086		(この頃に古市・横路遺跡が成立・発展する)
	1127		
	1185	文治元	
鎌倉	1193	建久4	佐々木定綱、初代石見国守護となる
	1200	正治2	守護の佐々木氏が石見に来た唐船について報告する
	1223	貞応2	石見国惣田数注文が作成される
	1228	安貞2	周布兼定、周布郷等を安堵される (この頃古市・横路遺跡が衰退する)
	1255	建長7	心覚院の木造阿弥陀如来立像が作られる
	1281	弘安4	石見の海岸に18の砦を築くという
	1297		
1333			
南北朝	1334		
	1336		
	1338		(この頃、足利直冬が石見国人とともに活動する)
	1368		(この頃、大内氏が石見に進出する)
	1392		
室町	1401	応永8	大内氏によって瀬摩分郡知行(～03の頃)が行われる
	1425	応永32	朝鮮国張乙夫ら長浜に漂着し、周布兼仲が保護、送還する
	1443	嘉吉3	三隅信兼の助力を得て宝福寺・大般若経が写経される「浜田」の初見
	1447	文安4	周布和兼、朝鮮から図書を賜る
	1467	応仁元	益田氏・三隅氏が朝鮮と通交する
	1468	応仁2	北江津の都野氏、朝鮮と通交する
	1471	文明3	桜井津の土屋氏、朝鮮と通交する 長浜浦が『海東諸国紀』に記される
	1481	文明13	益田氏と三隅氏が伊甘郷の領有で対立する
	1521	大永元	尼子氏が石見に進攻する
	1526	大永6	大内氏と尼子氏が浜田・天満で戦う 石見銀山の開発がはじまる
	1529	享禄2	毛利氏が高橋氏を滅ぼす
	1533	天文2	銀山に灰吹法が導入される
	1540	天文9	尼子氏が毛利氏の吉田郡山城を攻める
	1543	天文12	大内・毛利氏が尼子氏の富田城を攻める
	1545	天文14	尼子氏、出雲を制圧する
	1549		(この頃、福屋氏が浜田方面に進出する)
	1551	天文20	陶氏、大内氏を滅ぼす
1555	天文24	毛利氏、陶氏を滅ぼす	
1557	弘治3	毛利元就、長門・周防を制圧する	
1559	永禄2	小笠原氏が毛利氏に降伏する	
1562	永禄5	毛利氏、銀山を直轄 福屋氏滅ぶ この頃『籌海図編』に浜田、長浜が記される	
1566	永禄9	毛利氏が尼子氏を降伏させる	
1569	永禄12	浜田に唐船来航という	
安土桃山	1575	天正3	島津家久、浜田に逗留
	1582	天正10	吉川氏が伊甘郷をおさえる
	1587	天正15	細川幽斎、温泉津や浜田を日記に記す
	1597		
	1600	慶長5	益田・周布・吉見氏等が長門国へ移る
	1601	慶長6	津和野へ坂崎直盛が入部 大久保長安、銀山奉行となる
江戸	1603		
	1616	元和2	千姫事件で坂崎家が断絶する
	1617	元和3	亀井政矩の入部により津和野藩が成立する
	1619	元和5	古田重治の入部により浜田藩が成立する
	1622	元和8	浜田の城下町がほぼ完成する

西暦	年号	日本の主な出来事	アジアの主な出来事
1051	永承6	前九年の役	
1083	永保3	後三年の役	
1086	応徳3	白河上皇、院政を行う	
1127	大治2	(日宋貿易が活発となる)	金により北宋滅亡、南宋復興
1185	文治元	壇の浦の戦い 平氏滅亡	(ポルトガル建国)
1192	建久3	源頼朝、鎌倉幕府を開く	
1234	文暦元		モンゴル、金を滅ぼす
1258	正嘉2		アッバース朝、モンゴルによって滅亡
1274	文永11	文永の役、元の来襲	(モンゴル、元に改称)
1279	弘安2		元、南宋を滅ぼす
1281	弘安4	弘安の役 元が再度来襲	
1297	永仁5	永仁の徳政令 (この頃宋銭が流通)	(オスマントルク建国)
1333	元弘3	鎌倉幕府が滅ぶ	
1334	建武元	建武の新政	
1336		南北朝の分立	
1338		足利尊氏、室町幕府を開く	(タイにアユタヤ朝成立)
1368		(この頃、前期倭寇が活発化する)	元滅亡、明建国
1392	明德3	南北朝合一	高麗滅亡、李氏朝鮮建国
1401	応永8	日明貿易の開始 (この頃明銭が流通)	
1429	永享元	琉球王国が建国される	
1443			
1447			
1467	応仁元	応仁の乱(～77)	ビザンツ帝国が滅亡
1492	明応元		コロンブスがアメリカ大陸を発見
1498	明応7		ガマがインド航路を発見
1510	永正7		三浦の乱、朝鮮で日本人が反乱
1521	大永元		スペイン、アステカ王国滅亡
1526	大永6		インド、ムガル帝国建国
1529			
1533	天文2		ピサロがインカ帝国を征服
1540			
1543	天文12	ポルトガル人によって鉄砲が伝えられる	
1545			
1549	天文18	ザビエルによってキリスト教が伝えられる	
1551	天文20	(この頃、後期倭寇が活発化する)	
1555			
1557	弘治3		ポルトガル、マカオに居住権を獲得
1559			
1562			
1566			
1573	天正元	織田信長によって室町幕府が滅ぶ	
1582	天正10	本能寺の変	
1590	天正18	豊臣秀吉によって全国が統一される	
1592	文禄元	文禄の役、朝鮮出兵	
1597	慶長2	慶長の役、朝鮮へ再出兵	
1600	慶長5	関ヶ原の戦い	イギリス、東インド会社設立
1601			
1603	慶長8	徳川家康、江戸幕府を開く	(オランダ、東インド会社設立)
1616	元和2		後金建国
1617			
1636	寛永13		後金、清と改称
1641	寛永18	鎖国の完成	

第2は、こうした大きな時代の変化をもたらした最大の要因が民衆の成長にあったことです。自らの責任と努力において、自立的に小規模な農業生産や商業・手工業生産を営む農民・商手工業者が登場し、成長を遂げていったこと、そして自分たちの経営や生産を守り、発展させるために、彼らがそれぞれ独自に団結を強め、自治的な結合を発展させていったことです。

第3に、その結果として、中世末の戦国時代には全国各地に戦国大名が群雄割拠する状況が生まれ、果てしない覇権争いを演じる戦国の争乱が展開されることとなりました。

次に、こうした中世の日本を取り巻く世界の状況はどうであったかという、これもまた次のような特徴を指摘することができます。

まず第1は、東アジアの東端に位置する日本にとって、この当時の「世界」というのは、基本的には依然として高度な文明を誇る中国を中心とした東アジア世界であったことです。

第2に、しかし古代の世界帝国=唐の滅亡にともなって、中国を中心とする東アジア世界の体制が緩み、日本や朝鮮・チベット・ヴェトナムなど周辺の諸地域や国家の自立化が進んだこと、そしてこれにともなって、なお中国を中心とするとはいえ、それぞれの地域や国家の自立性を前提とする緩やかな国際関係が成立したことです。また、中国や朝鮮が公の外交を拒否する海禁政策を取ったこともあって、その国際関係は古代の国家間の交渉に代わって、僧侶や商人などの民間人

を主体とするものへと移行し、間接的ではありますが、空間的にも東南アジア・東北アジアを含むものへと大きく拡大しました。沖縄地方に1個の独立した国家＝琉球王国りゅうきゅうが誕生し、東アジアと東南アジアとを結ぶ積極的な中継貿易を展開したのはこの時代の後半、南北朝から戦国時代にかけてのことでした。

第3に、モンゴルやイスラームなどのユーラシア大陸またかを股に掛けた巨大な世界帝国が誕生し、それへの反発と東アジア諸国との直接的な交渉を求めて西ヨーロッパ諸国が大西洋に乗り出し、新大陸の「発見」を含むいわゆる「大航海時代」が始まったのもこの時代のことです。コロンブスが新大陸を「発見」したのは1492年、そして西ヨーロッパ人＝「南蛮人」なんばんじんが初めて日本を訪れ鉄砲てつぱうを伝えたのは1543年、キリスト教を伝えたのは1549年のことでした。文字通り世界が1つに結ばれる（その本格的な展開は18世紀中ごろのイギリスの産業革命を経て以後のことですが）中で、東アジア世界の秩序も新たに再編成されていった時代、それが日本の戦国時代のことだったのです。戦国の争乱の終結（＝天下統一）と秀吉による朝鮮出兵、近世幕藩制国家ぼくはんせいの成立と海禁政策（＝「鎖国」さこく）の成立は、こうした世界構造の転換への日本なりの対応を示すものであったと考えることができます。

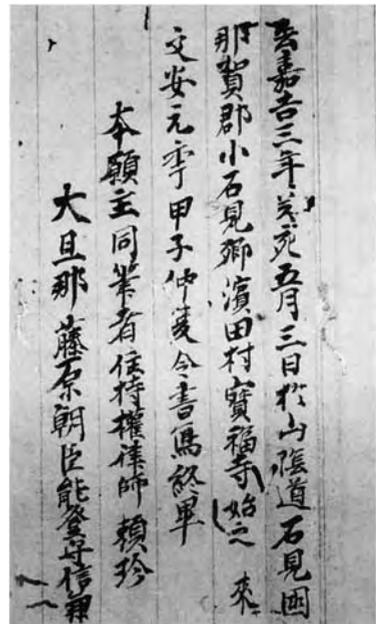
(2) 中世の浜田地域

では、この時代の浜田はどういう状況だったのでしょうか。いくつかの特徴的な点をごく簡単に整理しておくことにしましょう。

まず「浜田」という地名ですが、もとは現浜田市中央部と金城町の一部にまたがる小石見郷こいわみごうの中の1村名に過ぎませんでした。嘉吉3年(1443)から文安元年(1444)の間に書写された、現浜田市大辻町の宝福寺所蔵の大般若経奥書だいほんにやきょうおくがきに「那賀郡小石見郷濱田村」と見えるのがその明確な初見です。ところが、ここにあった港が大変な賑わいを示したところから、やがてその沿岸部一帯が浜田と呼ばれるようになり、さらに近世初頭に浜田藩が置かれ、浜田の城下町が栄えることによって、今日の浜田市の基礎が築かれたのです。「浜田」は中世に生まれ、定着



宝福寺 (浜田市)

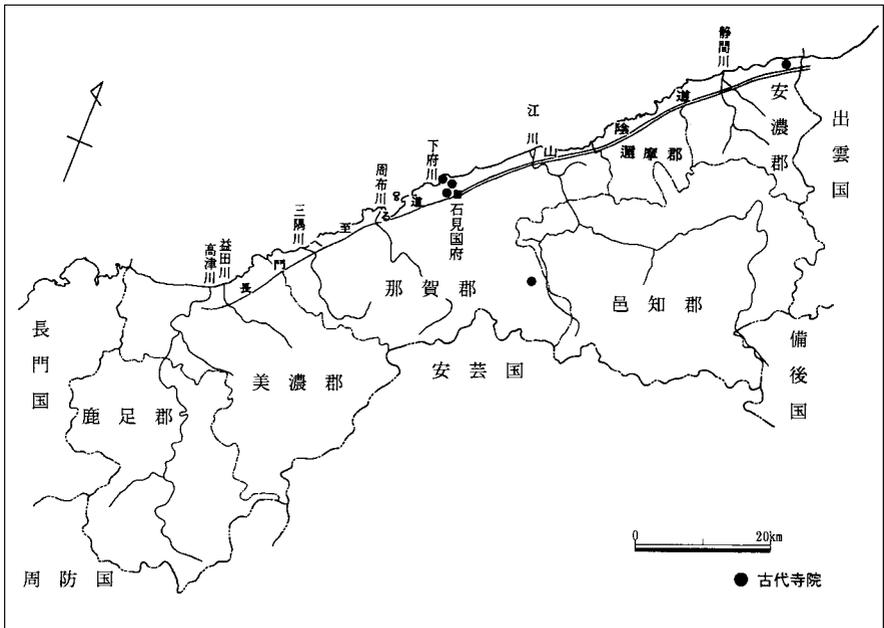


紙本墨書大般若経奥書 (市指定文化財)

していった地名であったということが出来ます。

中世の浜田地域は石見国のほぼ中央、石見6郡のうち的那賀郡に属し（他に東から安濃・邇摩・邑智、及び美濃・吉賀〈鹿足〉）の各郡がありました）、日本の政治・経済の中心（京都）から陸路では遠く離れた辺境に位置しましたが、朝鮮半島・中国大陸やそれへの窓口（対馬・博多）からは至近距離にある日本海沿岸部に位置していました。

中世の浜田地域は、その地理的な位置とも関わって、古代以来ここに石見国府が置かれ、中世にも石見府中（=中世の政治都市）として石見国支配の政治的・軍事的中心をなすとともに、経済的・文化的な



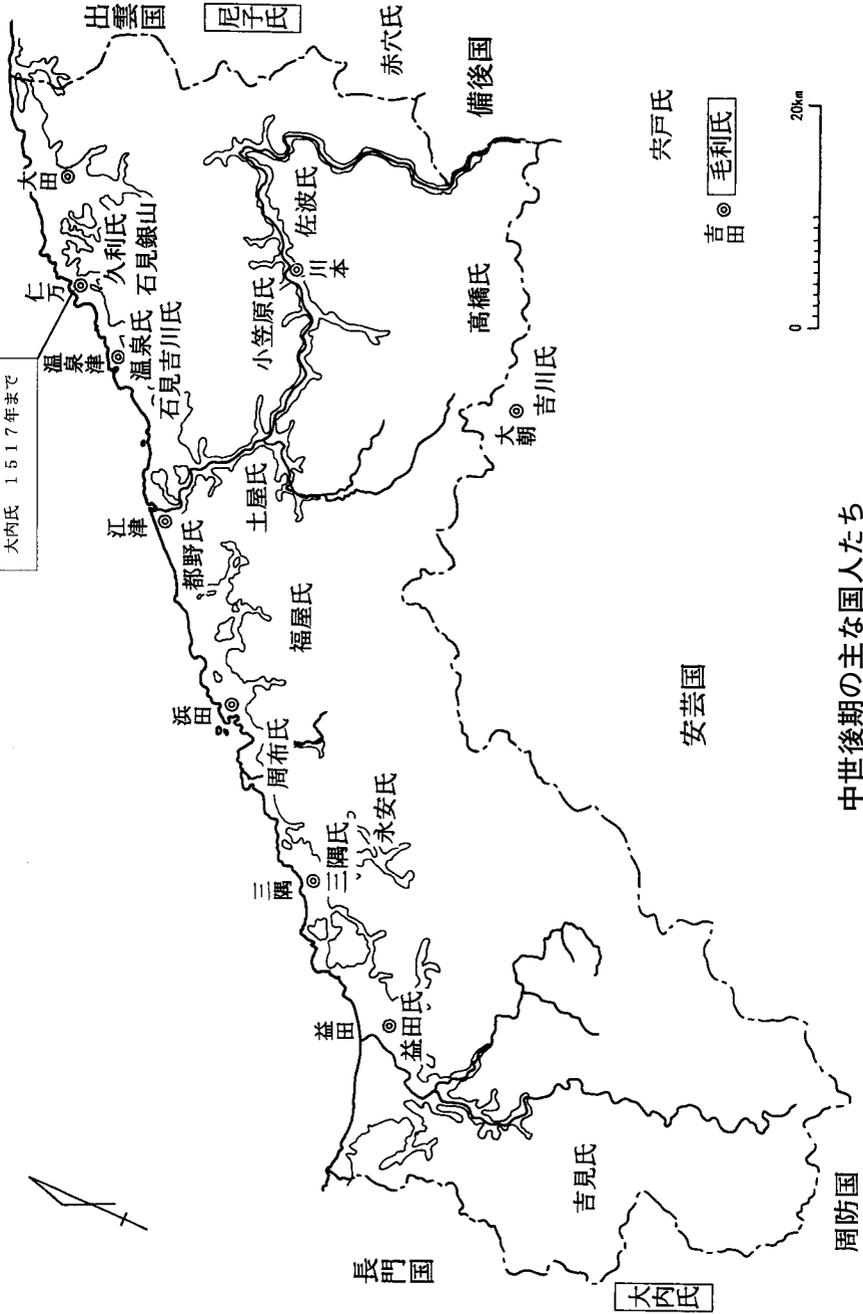
古代の石見と国府

中^{ちゅうすう} 枢としての機能をも果たしていました。しかし、南北朝から室町時代の初めごろ（14世紀）を^{かつき}画期として、それまでの石見国における政治的・経済的中枢としての機能を大きく後退させることとなりました。その理由として、とくに次の2つの点が重要だと考えられます。

第1に、南北朝内乱の過程を通じて、それまで石見国衙とその役人たち（国衙在^{ざい} 庁^{ちやう} 官^{くわん} 人^{じん}）の果たしてきた政治的・社会的機能が守護権力によって吸収され（それは石見だけでなく、出雲などを含めた全国的な動向です）、またこれと相前後して益田氏など国衙の在庁官人層もそれぞれの本拠地に拠点を移し、国衙固有の機能が著しく衰退したことです。

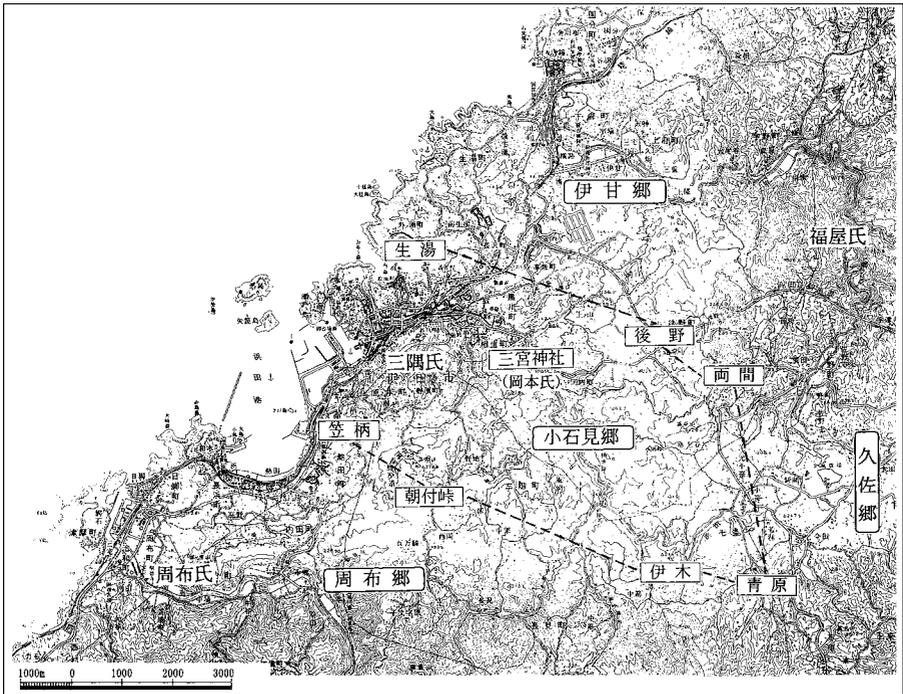
第2に、南北朝時代以来、石見国の国衙・守護権力を握っていた大内氏が、室町時代初めの応永の乱（応永6年<1399>）を契機として邇摩郡に拠点を移し（邇摩郡だけを知行する分郡知行によります）、これ以後邇摩郡（現在の^に 仁^ま 摩^ま 町^{ちやう}を中心とする地域）が石見国における新しい政治的・経済的中枢としての機能を果たすようになったことです。とくに戦国時代には石見^{いわみ} 銀^{ぎん} 山^{ざん}が開発され、これが各戦国大名の^{すい} 垂^{すい} 涎^{えん}的となったこともあって、邇摩郡（とくに石見銀山と^ゆ 温^の 泉^つ 津）が石見国の政治的・軍事的焦点として注目を集め、石見国の全体的な統一性が失われ、著しい地域的分散化（各領主がそれぞれ割拠し、勢力を競い合う状況。出雲^{あまこ} 尼^こ 子^こ 氏^しなどのように、石見に拠点を置き石見国全体を統括する戦国大名は存在しませんでした）が進行したのです。

瀬摩分郡知行
大内氏 1517年まで



中世後期の主な国人たち

こうした中世石見国の国としての統一性^{けつじょ}の欠如は、平野部が少なく、海^{うみ}のすぐ近くまで山が迫っているという地理的な条件、あるいはそうした中で各領主がそれぞれ山と谷^{へだ}で隔てられた各地に割拠するという条件によっても規定されていたことが考えられます。



中世後期の浜田（破線は小石見郷の大まかな範囲）

〈松村建『中世後期の村落と土豪』掲載図を修正・加筆〉

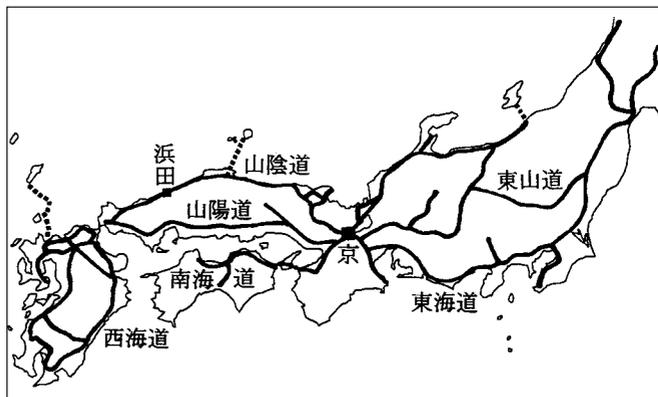
II. 西日本海地域の水運と浜田

(1) 西日本海水運の成立と古市遺跡

日本海に面して立地し、全体に平野部が少なく、海のすぐ近くまで山が迫っているという石見の地理的な条件は、ここに住む人々がそれだけ強く海に依存し、早くから海を用いて種々の交易や交流を展開してきたことをうかがわせるものでもあります。

こうした日本海の海上交通は、日本列島が形成された縄文時代^{じょうもん}、あるいは稲作が日本に伝えられた弥生時代^{やよい}以来の長い歴史と伝統を持つと考えられますが、しかし7世紀後半の古代律令制国家の成立にともなう、そうした歴史と伝統はいったん強制的に断絶を強いられることとなりました。中央集権的な古代国家の成立にともなう、山

陰道や山陽道・東海道・北陸道の開設など、都に通じる求心的な陸路^{きゅうしんてき}を中心とする交通体系が整えられ、合わせて対外的な交易・交渉権がす

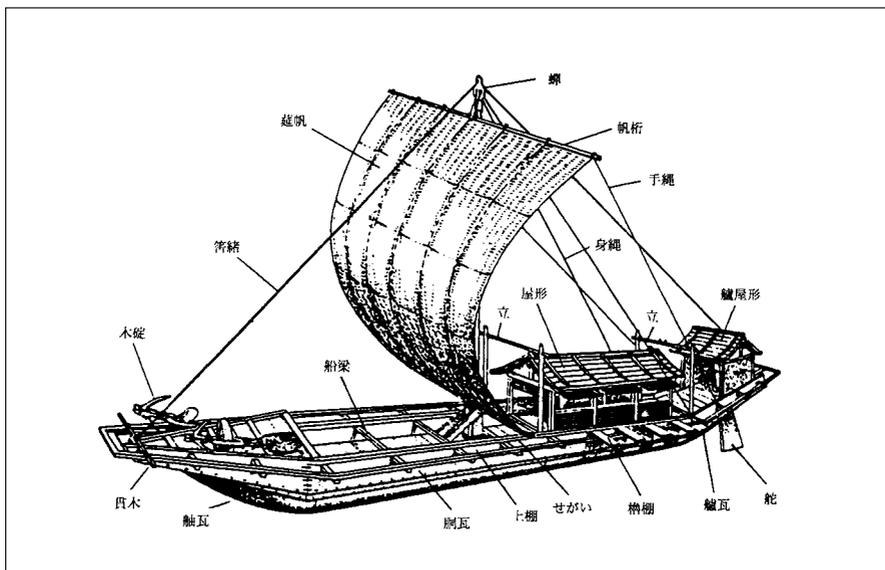


古代の交通体系

べて中央国家権力の手独占され、その窓口が摂津や山城（京都・大阪）などの畿内地方に独占されることとなってしまったからです。それまで、いち早く大陸からの進んだ文明を受け入れ、それを列島各地に伝える窓口として機能した日本海沿岸地域（＝「表日本」）は、都から遠く離れた辺鄙な地域（＝「裏日本」）へと、大きな転換を余儀なくされたのです。

しかし、こうした体制は、古代律令制国家の解体と中世社会への移行にともなって、再び大きく転換を遂げることとなります。

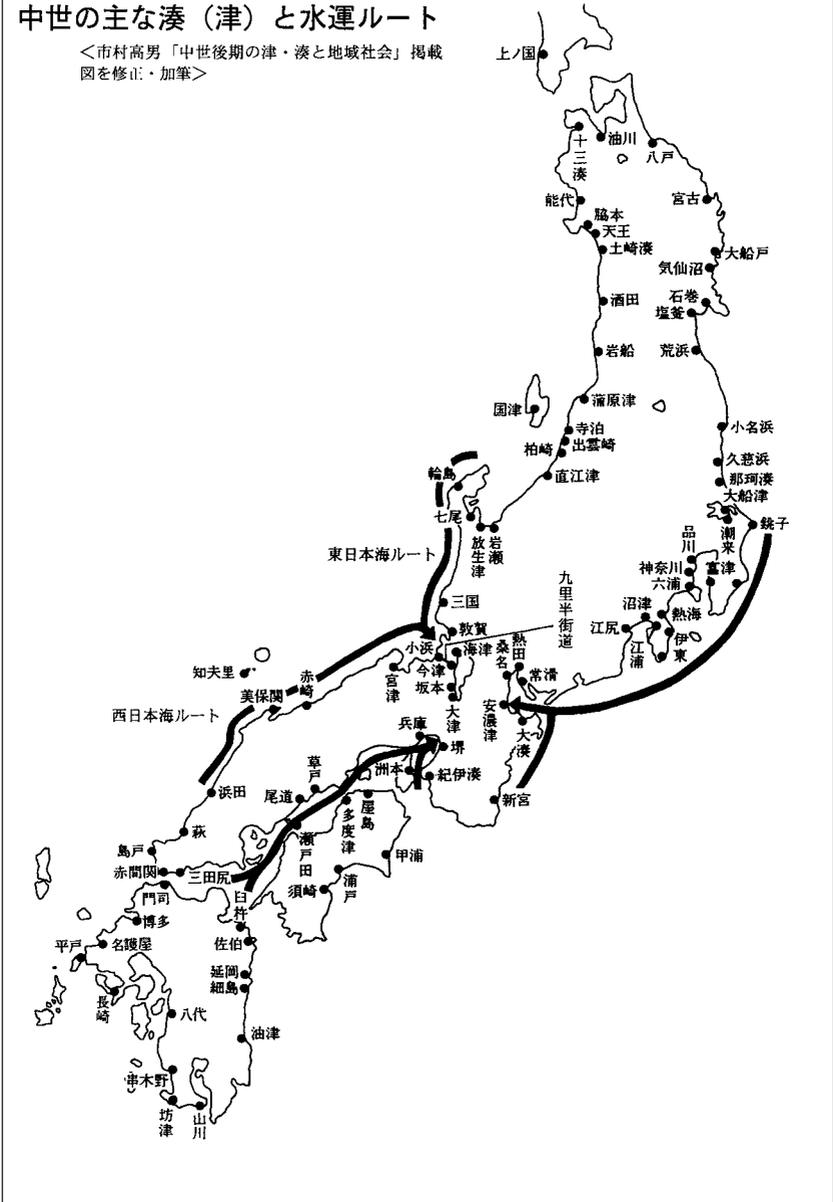
律令国家の衰退にともなって山陰道などの陸路による交通機能が著しく低下する一方、都に住む荘園領主のもとに直接全国各地から年貢



鎌倉時代の大型船（山口県立山口博物館『海の日本史』より転写）

中世の主な湊（津）と水運ルート

＜市村高男「中世後期の津・湊と地域社会」掲載
図を修正・加筆＞



などを簡便、かつより効率的に運搬する必要性から、海上交通が基幹的な交通手段としての地位を占めることとなったからです。山陰地方からは、丹後半島の東・若狭国小浜（現福井県小浜市）を経て九里半街道・琵琶湖経由で京都に年貢を輸送する西日本海ルートが開発され、これが中世の基本的な交通手段として機能することとなりました。また、新しい中世的な東アジア世界秩序の形成にともなって、日本海沿岸部の領主や商人たちが直接大陸に出向いて交易を行う道が開かれることになりました。原始社会以来の歴史的な伝統が新たな形で復活し、そしてさらに大きく発展を遂げることとなったのです。

この中世の時代の日本列島の水運構造は、京都を中心にブロック状に編成されているところに大きな特徴がありました。北陸・東北などの東日本海地域は同じく若狭国の敦賀・小浜、太平洋側の東北・関東地域は伊勢国の安濃津経由、そして九州・四国・瀬戸内地域は瀬戸内海・淀川を経てそれぞれ京都に結ばれる構造となっていたのです。古代とは異なる、中世の権門体制国家に対応する交通・流通体系ということが出来ます。この交通体系は、中世を通じて基本的に変わりませんが、南北朝・室町時代、及び戦国時代にそれぞれ一定の重要な変化が生まれます。石見地方などの西日本海水運は、平安末・鎌倉時代の第1期と、南北朝・室町時代の第2期、そして戦国時代の第3期という3つの時期に区分して理解することができると考えられるのです。

では、そのそれぞれはどのような構造と歴史的な特徴を持っていた

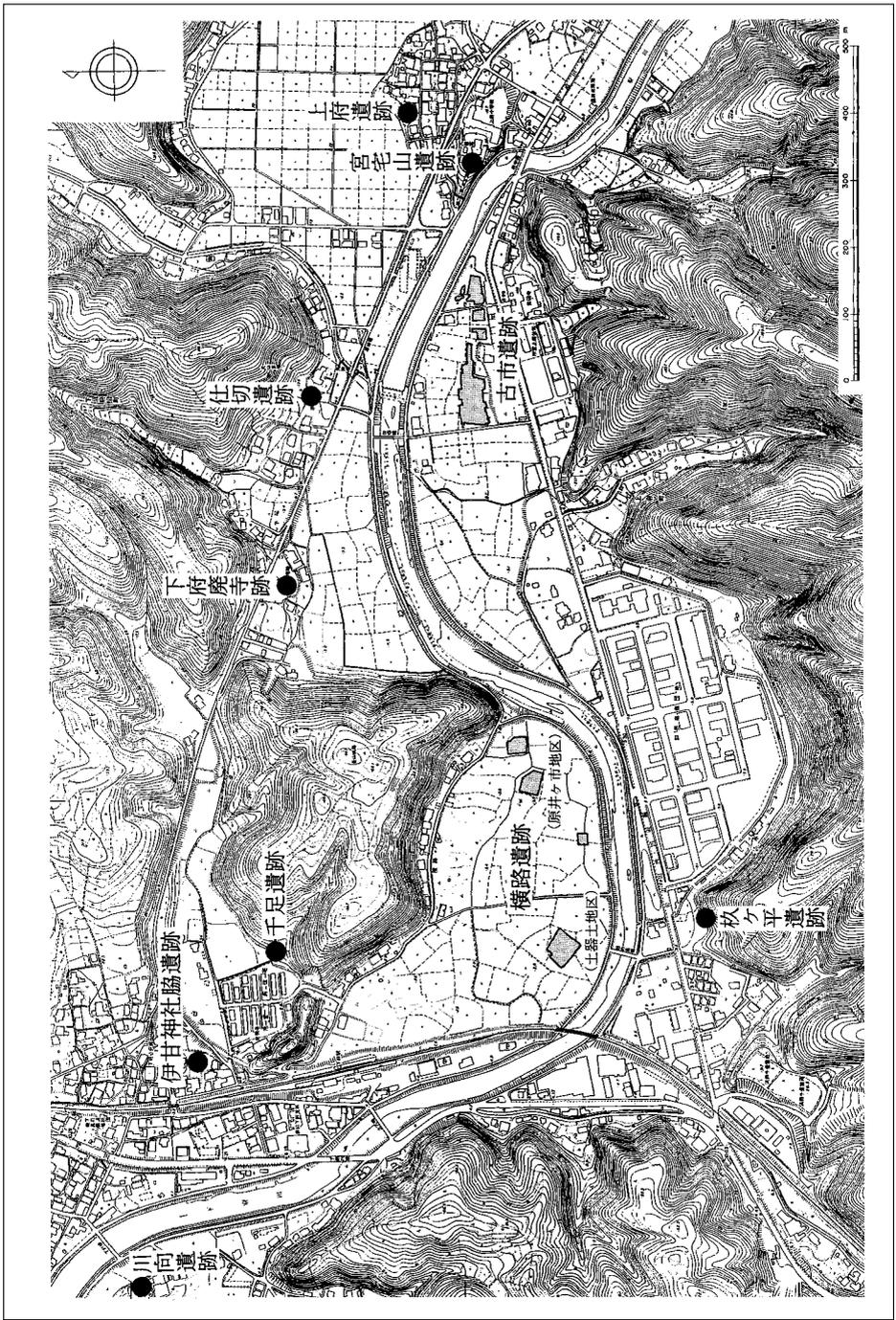


日本海から望む下府平野

のでしょうか。また、浜田地域は其中でどのような位置を占め、どのように発展していったのでしょうか。以下、その概要について考えてみることにしましょう。

第1期の浜田地域の様相について考える上で大変重要な位置を占める遺跡の1つに、現浜田市^{かみこう}上府町^{ふるいち}の古市遺跡があります。日本海から下府川^{しもこう}を約2kmほど^{さかのぼ}遡ったところに位置するこの遺跡は、11世紀後半～16世紀のものですが、その最盛期は12・13世紀を中心とする11世紀後半～14世紀であって、それは西日本海地域水運の第1期と完全に合致しています。

この遺跡がとりわけ注目されるのは、時期的な問題と同時に、次の2つの条件を合わせ持っているからです。その第1は、この地域が中世には石見国衙の所在地として「石見府中」と呼ばれていたことです。



古市・横路遺跡と中世前期の遺跡

この地域は、中世には伊甘郷^{いかみ}と呼ばれる国衙領に属していましたが、中でも現在の下府・上府地域は「石見府中」と呼ばれ、平安末・鎌倉時代を通じて、石見国支配の政治的・軍事的中心をなすとともに、経済的・文化的な中枢としての機能も果たしていました。

注目される第2の点は、この遺跡から出土した遺物の中に大量の中国製の陶磁器^{とうじき}が含まれており（陶磁器類は出土遺物全体の約10%を占め、その数は約1000点にも上ります）、これほど大量の中世前期の貿易陶磁器が出土した事例は、島根県や石見国内では他に例がないということです。加えて、古市遺跡から約1km下流に位置する下府の横^{よこ}路遺跡においても、時期を同じくする約700点の貿易陶磁器が確認さ



古市遺跡（Ⅰ・Ⅱ区）

れており、この下府川周辺一帯が大量の貿易陶磁器の搬入地であったことは間違いないと考えられます。

いったい、この大量の貿易陶磁器は何を意味しているのでしょうか。これほど大量の陶磁器がすべてこの地域で消費されたと考えることはできません。考えられるのは、いったん石見府中に搬入されたのち、改めて各地の領主などの求めに応じて石見国内や、場合によっては山陰地方の各地に再分配・搬出されていったということです。

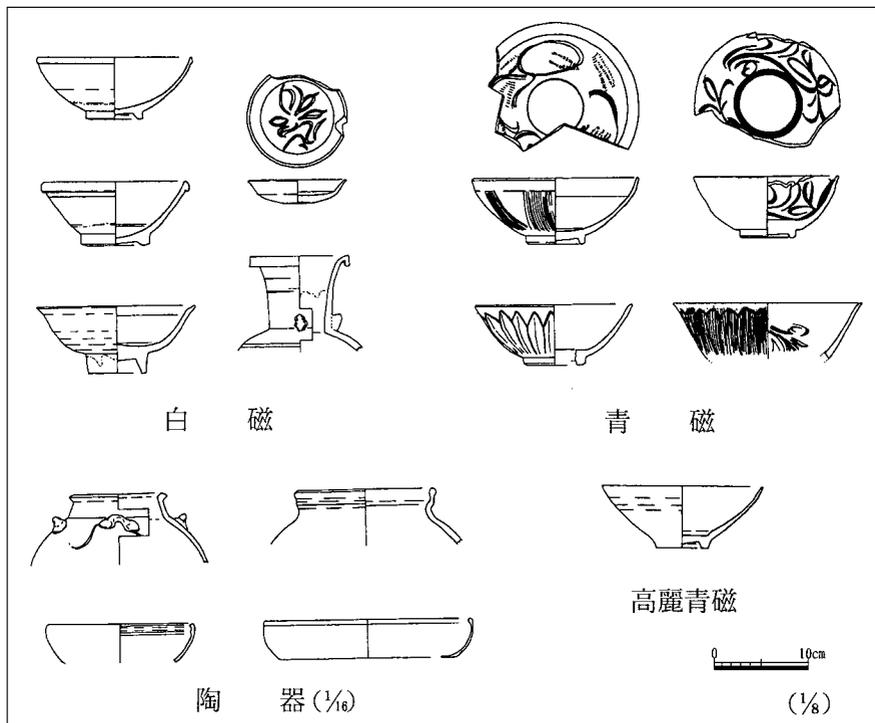
近年、こうした推測を支える事柄が次第に明らかとなりつつあります。その1つは「^{しゅうさんち}集散地遺跡」という問題です。^{ちくぜん}筑前国博多や伊勢国安濃津・若狭国小浜・^{よどのつ}摂津国淀津など、生産地から直接大量の物資を搬入し、それらを^{しわ}仕分けし、改めて搬出していく拠点的な港が日本列島の各地に存在したということが分かってきたのです。例えば、筑前博多の場合、明らかに使用に耐え得ない不良品を多数含んだ貿易陶磁器が大量に出土するところか



横路遺跡（土器土地区）



横路遺跡（原井ヶ市地区）

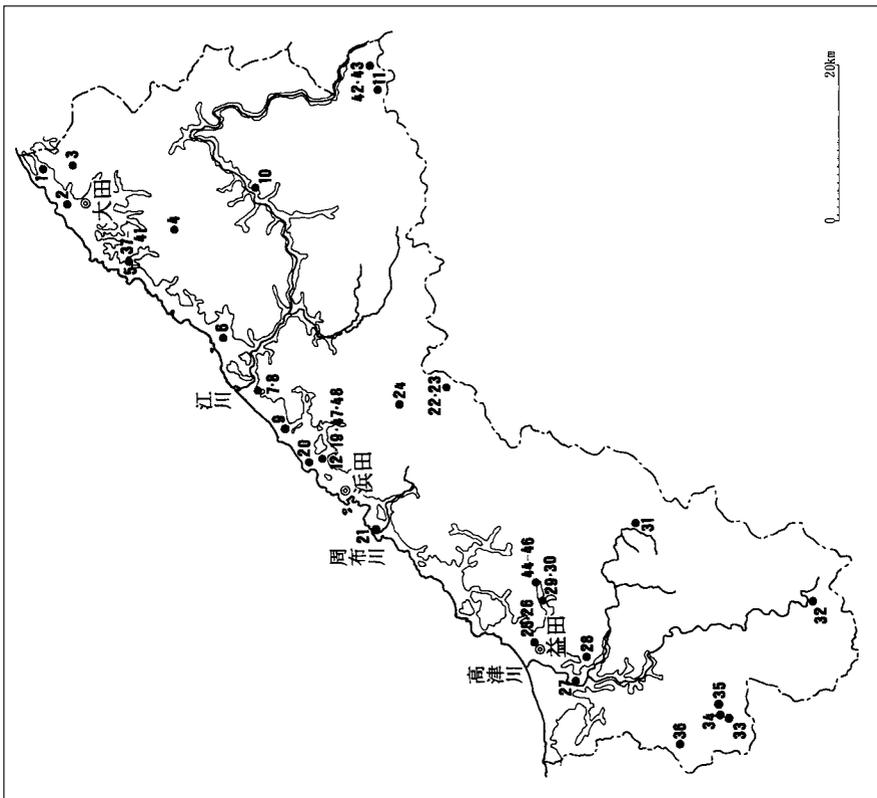


古市遺跡出土の貿易陶磁器

ら、これらは直接中国から^{かま}窯ごと購入して博多に持ち込み、ここで仕分け（不良品を選別・廃棄）して改めて列島内の各地に搬出されていったと考えられているのです。古市遺跡や横路遺跡の場合、いまのところ不良品の陶磁器は確認されていませんから、博多と同じ性格のものとするのはできませんが、しかし博多などから大量の陶磁器を一括搬入し、改めてそれを各地に搬出していったという点では、いわば第2次的な「集散地遺跡」ということができるのではないのでしょうか。

そうした意味で、いま1つ注目されるのは、近年の発掘調査の中で、

No.	遺跡名	所在地
1	高砂遺跡	大田市波根町
2	笹川遺跡	大田市静間町
3	円城寺前遺跡	大田市三瓶町
4	白坏遺跡	大田市水上町
5	白石遺跡	仁摩町天河内
6	波来浜遺跡	江津市後地町
7	半田浜西遺跡	江津市二宮町
8	宮倉遺跡	江津市二宮町
9	古八幡付近遺跡	江津市敬川町
10	キタバタケ遺跡	川本町川本
11	菅城遺跡	羽須美村戸河内
12	古市遺跡	浜田市上府町
13	横路遺跡	浜田市下府町
14	(土器土地区) 横路遺跡	浜田市下府町
15	(原井ヶ市地区) 伊甘神社脇遺跡	浜田市下府町
16	上府遺跡	浜田市上府町
17	大平遺跡	浜田市下府町
18	川向遺跡	浜田市下府町
19	下府院寺跡	浜田市下府町
20	前場氣連遺跡	浜田市国分町
21	鰐石遺跡	浜田市治和町
22	七渡瀬工遺跡	金城町辰佐
23	長田郷遺跡	金城町長田郷
24	岩塚工遺跡	金城町今福
25	三宅御土居跡	益田市三宅町
26	七尾城跡	益田市七尾町
27	羽場遺跡	益田市安富町
28	石塔寺権現経塚	益田市横田町
29	上久々茂土居跡	益田市久々茂町
30	大峠遺跡	益田市久々茂町
31	水田ノ上遺跡	匹見町紙組
32	河内遺跡	六日市町注連川
33	高田遺跡	津和野町高峯
34	喜時雨遺跡	津和野町田二繼
35	有福寺遺跡	津和野町中曾野
36	木園遺跡	津和野町中曾野
37	清石遺跡	仁摩町仁方町
38	京門原遺跡	仁摩町大國町



中世前期の貿易陶磁器出土遺跡

例えば現邑智郡羽須美村の坪ノ内遺跡や鹿足郡六日市町注連川の河内遺跡など、日本海沿岸や大規模な河川から遠く離れた内陸部に位置する遺跡からも、古市遺跡などで出土すると同時期の貿易陶磁器が多く見つかってきていることです。これら内陸部の遺跡から出土する貿易陶磁器は、そのすべてが九州や大陸から直接搬入されたとはとうてい考えることができません。やはり、第2次的な「集散地遺跡」を経由して搬入されたと考えるのが最も妥当といえるでしょう。

こうした考えは、現在のところ未だ推測の域を出るものではありませんが、古市遺跡や横路遺跡などの出土遺物の状況などから判断すると、博多などの「集散地遺跡」から日本海・下府川を経由して石見府中（古市遺跡など）に搬入された中国製の陶磁器が、今度は国衙支配機構や物資流通のための陸路・水運ルートを通じて石見国内、あるいは山陰地方の各地に搬出されていった様子を推測することは十分に可能で、その可能性は極めて高いと考えられるのです。

そして、もし以上の推定が認められるとすれば、そこからは次のような2つの問題を導き出すことができるといえましょう。

まず第1に、中世の荘園制支配（京都などの都に住む一握りの特権的な上級領主＝荘園領主が全国の土地と民衆を支配する体制）に対応する中世水運などの構造（さきに述べたように、ブロック状に編成された水運は、いずれも中世王権〈国王〉の所在地＝京都に結びつく形で完結する構造となっていました）、あるいは日本列島が大陸などの

諸地域に向けて開いていた拠点の窓口（九州博多・対馬・大隅薩摩・^{おおすみさつ ま}東北十三湊^{と さ みなと}など）とも関わって、日本列島全体の流通システムが京都を中心に編成され、かつそれらを支え、作動させる中間的な流通拠点が全国の各地、あるいは各国ごとに設けられるという構造を持っていたことが推定され、この古市遺跡は各国（あるいはより広域の地域）ごとに設けられた地域的流通システムの拠点のうちの1つとしての機能を果たしていたことが考えられます。

第2に、石見国内の各遺跡で発掘されてきている12世紀前後から14世紀にかけての貿易陶磁器は、いずれもこの古市・横路遺跡経由で搬入された可能性が考えられ、石見国内（あるいは山陰地域全体に^{またが}跨る）の流通システムの構造や具体的な物資の流れ、あるいはそれを支えた社会的諸条件（流通路や商人組織など）を解明していくことが今後の重要な課題になるということです。

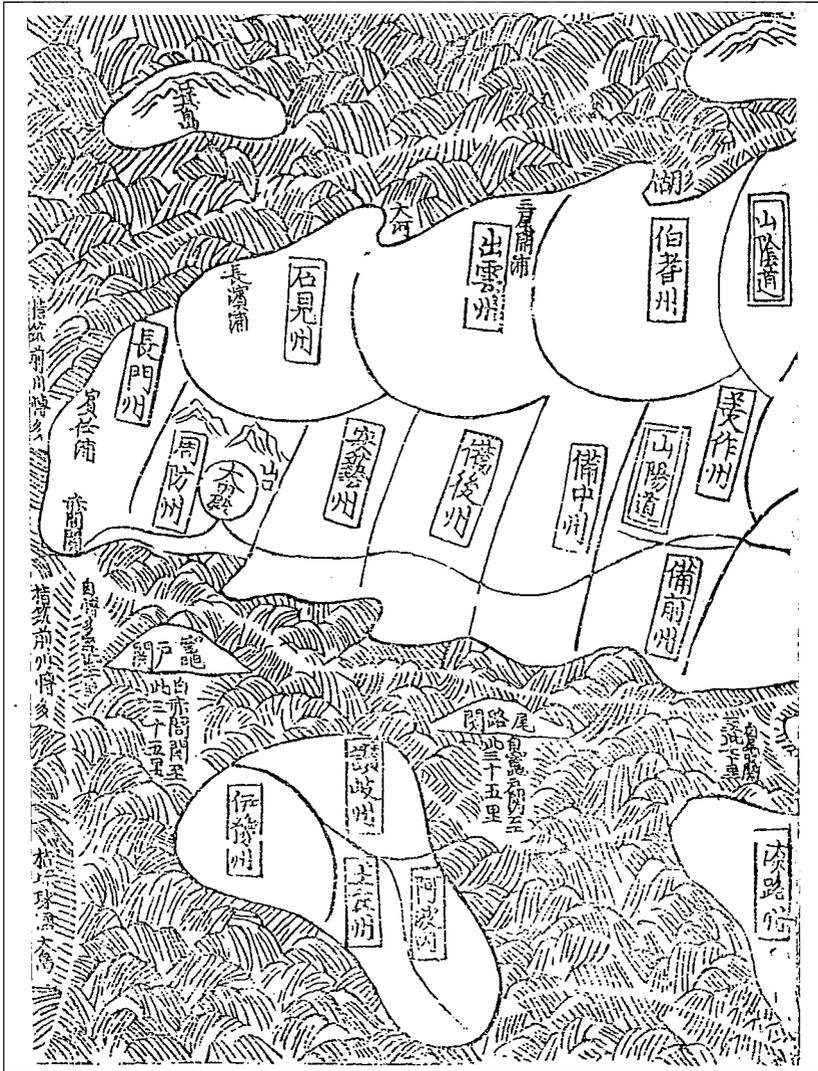
古市・横路の両遺跡は、こうした問題を提起した遺跡として極めて重要な位置を占めていると考えることができるのです。

(2) 周布氏の対朝鮮交易

以上に見てきたように、平安末から鎌倉時代に至る西日本海水運の第1期というのは、京都への年貢輸送を中心として機能しており、それは荘園制支配システムの重要な一環をなしていたと評価することができます。ところが、鎌倉時代の末期から南北朝時代にかけて大きな社会変動が起こり、これにともなって西日本海水運の構造も第2期へと移行していくこととなります。

その社会変動とは、1つには商品流通や貨幣経済の発達、いま1つは荘園制支配の変質と動揺という問題です。このうち前者は、荘園制支配の成立と安定にともなう生産力の発展が1つの大きな要因と考えられますが、いま1つにはそれと一体となった、日本海水運を含む物資流通システムの整備・発展も考えなければなりません。

京都への年貢輸送に重心が置かれているとはいえ、日本列島の全体を覆^{おお}う中世的な水運構造の成立は、中央と地方あるいは各地方内部の交流と物資流通に大きなインパクトを与え、大いにこれを促進する影響を与えたと考えられます。山陰地方についてみても、西日本海水運の成立と発展にともなって、京都や畿内地方との距離が一挙に縮まり、人・物・情報の交流が量的にも、また質的にも飛躍的に拡大したことが考えられます。同様に、山陰地方の各地域間においても、水運を用いての交流・交易が飛躍的に拡大・発展し、相互に緊密な関係で



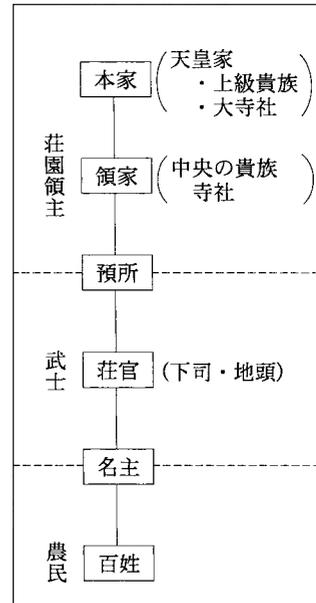
かいとうしょこくき
海東諸国紀 (国立公文書館所蔵)

1471年に朝鮮の申叔舟が日本と琉球について詳しく記したもの。地図には「石見州」とあり、「長濱浦」が記載されている。

結ばれるようになったと考えられます。古市遺跡や横路遺跡などに集荷された貿易陶磁器が、石見国内や山陰地方の各地に盛んに搬出されていったというのも、そうした商品流通や貨幣経済の発達の具体的な一面を示しているということができましよう。

鎌倉時代の後半以後、畿内地方から始まって、次第に全国的なレベルで荘園年貢の^{せんのおか}錢納化が進んでいったとされるのも、こうした動きに対応するものであったと考えられます。そしてそうした中で、とくに^{もうこしゅうらい}蒙古襲来以後、多数の鎌倉幕府御家人が^{こけにん}借金に苦み、これを救済しなければならないという状況も起こったのです。

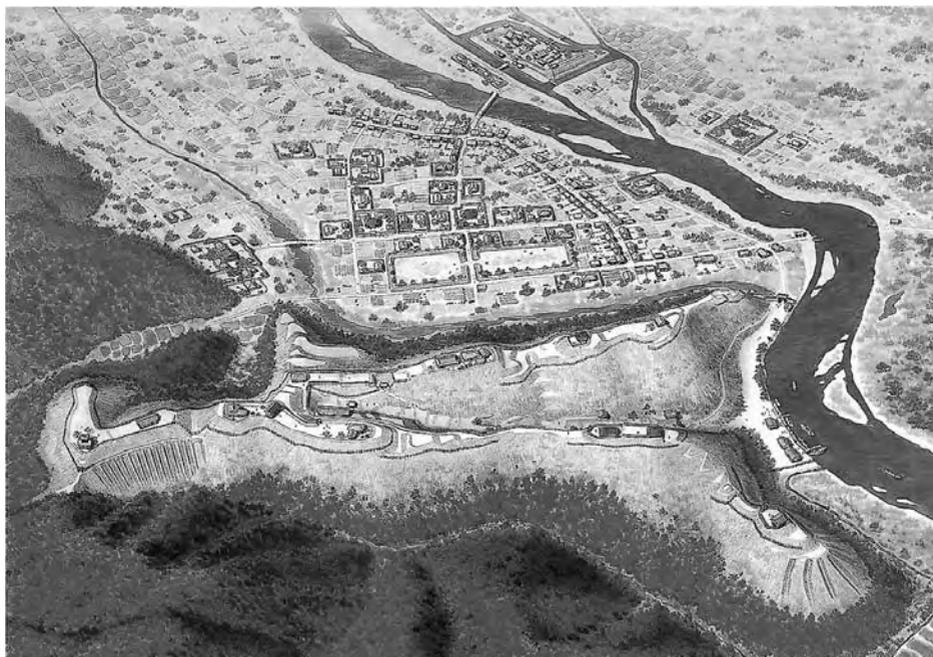
後者の荘園制支配の変質・動揺というのも、このことと深く関わっています。商品流通や貨幣経済の発達というのは、要するにその^{にな}担い手である農民や商手工業者などの民衆の成長を意味していますから、荘園制支配もそれへの対応を求められます。これには様々な問題が含まれていますが、共通していえる最も重要なことは、荘園制支配の実権がそれまでの京都に住む特権的な上級領主（荘園領主）から、在地にあって直接民衆と向き合う下級の領主（在地領主 = 武士層）の手に移っていったことです（もちろん、これは相対的な問題であって、



荘園支配のしくみ

荘園制支配あるいは荘園領主による荘園支配そのものは中世末期の戦国期まで維持されました)。

第1節において、南北朝内乱前後に益田氏など国衙の在庁官人層がそれぞれの本拠地に拠点を移し、国衙固有の機能が著しく衰退したことを指摘しておきましたが、こうした動向が顕著となってくるのが鎌倉時代の後半から末期以後のことだったのです。益田氏の場合も、鎌倉時代の末期に一族の代表である惣領そうりょうが那賀郡伊甘郷の府中地域から美濃郡益田荘内に拠点を移し、南北朝時代には荘園領主せつかん九条摂関家に代わって益田荘支配の実権を握っていきます。石見や山陰地方などの

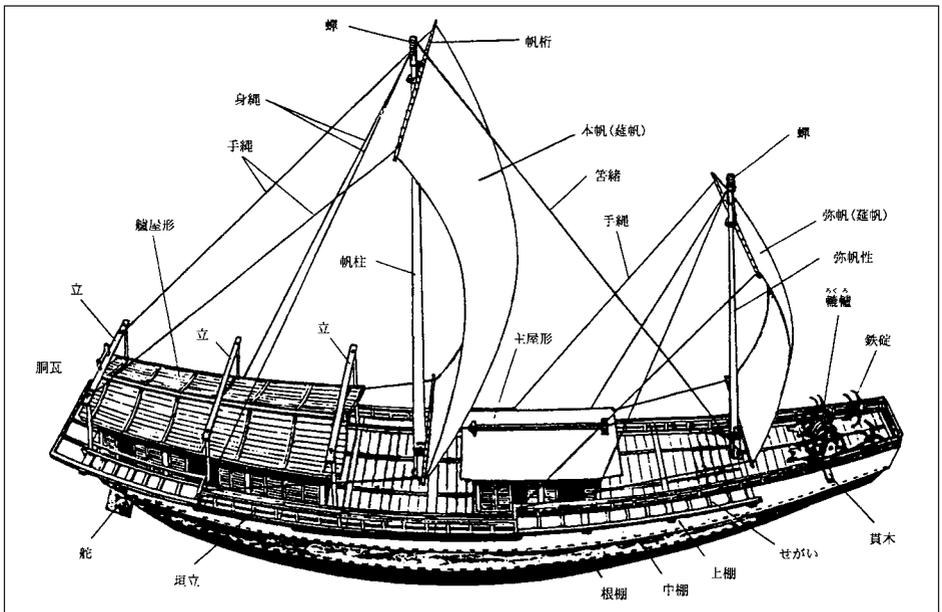


益田氏の城・館そしてその城下

(イラスト：香川元太郎氏 益田市教育委員会提供)

京都や畿内地方から遠隔地にある荘園では、こうした動向がとくに顕著に現れることとなったのです。

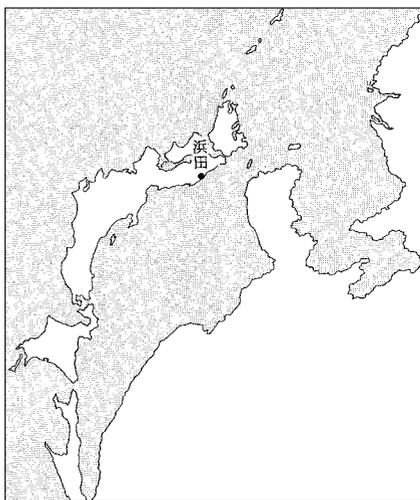
では、このようにして生まれた西日本海水運の第1期から第2期への移行にともなって、具体的にどこがどのように変わったのでしょうか。この点で、まず第1に注目されるのは、第1期に較べ対中央と地域間との交流の比重が逆転し、山陰地方などにおける地域間相互の交易・交流がそこでの中心的な位置を占めるに至ったことです。これは、成長を遂げた民衆や、各国内の諸処に割拠する在地の領主層のあり方から考えて当然のことであったといえるでしょう。石見国内（あるいは



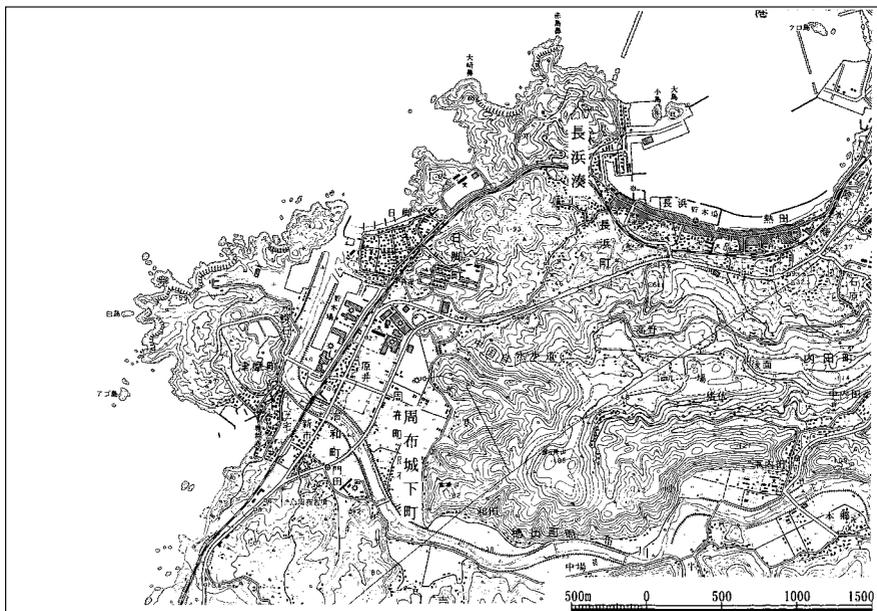
けん せん せん 遣 明 船 <山口県立山口博物館『海の日本史』より転写>

は山陰地域)各地の領主や民衆が国衙などを介さないで直接的に交易・交流を行う流通システムの成立。これが古市遺跡や横路遺跡の衰退をもたらす、最も基本的な要因であったと考えられるのです。

第2に注目されるのは、こうした流通構造の変化にともなって、そこで扱われる物資の中身や、その扱い方そのものが大きく変化し



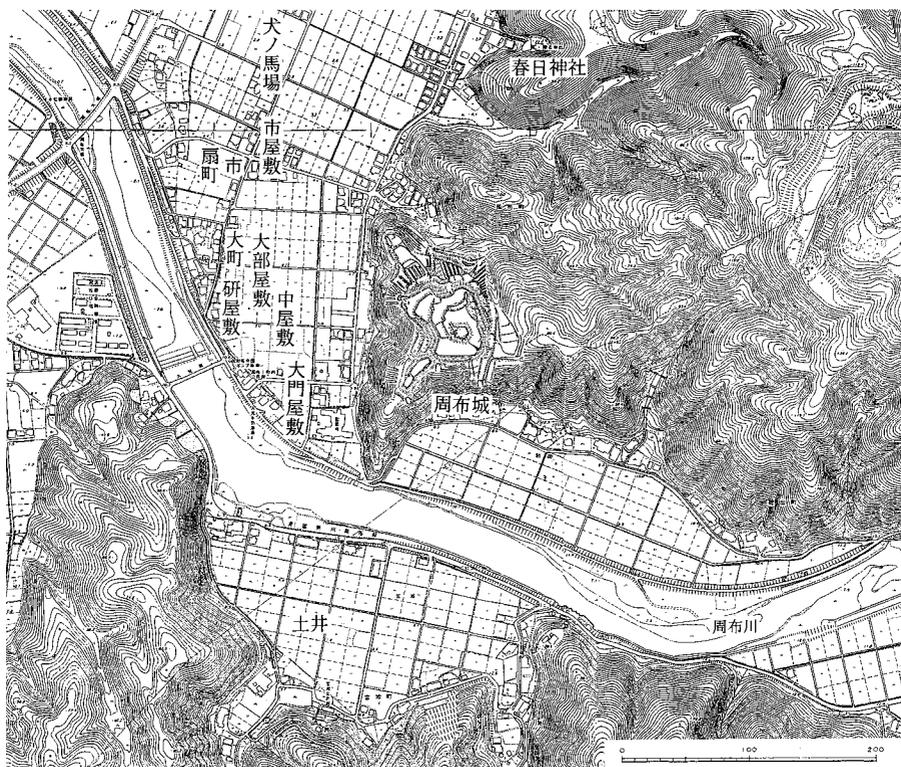
内海としての日本海



長浜湊と周布城下町

たことです。すなわち、交易・交流の密度が高まる中で、日常生活に必要な諸物資はもちろんのことながら、それ以上に各地の特産物に対する需要が高まり、それらを求めて遠隔地との交易が盛んに行われるようになったと考えられるのです。

以上を要するに、それぞれの地域が主体となった^{かくちかんこうえき}隔地間交易と交流の高まり、ここに第1期とは異なる第2期の特徴を見ることができま
す。第1期にはなかった第2期の大きな特徴、^{すふ}周布氏などの対朝鮮交



周布城（鳶巣城）と小字が示す城下の広がり

易はこうした状況の中で進められることとなったのです。それは、列島内における隔地間交易の延長線上に、日本海を内海^{うちうみ}として各地の領主や商人たちが直接大陸に出向いて交易を行う新しい流通システム、山陰地方と北九州・朝鮮半島を1つに結ぶ独自の地域的世界の成立を意味しているといえるでしょう。文字通り西日本海水運が本格的に成立することとなったのです。

よく知られているように、長浜^{ながはま}を拠点とする周布氏の対朝鮮交易は



西から望む周布の城下町

(中央やや左の丘陵が周布城跡<鳶巣城跡>)

朝鮮官船の漂着ひょうちやくという偶然の機会から始まったものでした。応永32年（1425）、鬱陵島うつりょうとう（茂陵島）に逃亡した人民を捕らえるため出向っていた朝鮮官船が暴風に遭い、わずかに生き残った張乙夫ちやういつぶら10人が石見長浜に漂着したのが事の始まりです。張らは、この地の領主「順都老じゆん」（周布兼仲かねなか）の保護を得て1月ほど石見に滞在したのち対馬に護送され、そこの有力者早田左衛門太郎の協力を得て、無事朝鮮に送

〔周布氏の朝鮮通文〕

【世宗七年（一四二五）十二月癸巳条】

茂陵島入帰時、飄風船軍平海人張乙夫等、回自日本國言、初船軍四十六人、乘坐一船、隨安撫使金麟雨向本島、忽颶作船敗、同船三十六人、皆溺死、我等十人、移坐小船、瓢至日本國石見州長濱、登岸、飢困不得行、匍匐至五里餘、得泉飲水、困倒江邊、有一倭、因漁來見、率歸一僧寺、与餅茶粥醬、以食之、領赴順都老、順都老見我等衣曰、朝鮮人也、嗟嘆再三、給口糧・衣袴、留三十日、日三供頓、臨送設大宴、執蓋親勸曰、厚慰爾等、乃為朝鮮殿下耳、給行糧百石、差人二十、護送至對馬島、亦留一月、都萬戸左衛門太郎、三設宴、勞之曰、非為爾等、敬殿下此如耳、又差人護送回来、石見州長濱因幡守致書禮曹曰、今年九月、貴國人十人、飄風至此、即時治船護送、回付對馬都萬戸轉送、兼進環刀二柄・丹木一百斤・朱紅四面・盤二十・胡椒十斤、左衛門太郎致書禮曹曰、今石見洲長濱因幡守、知小人交通貴國、送飄風貴國人十名、令小人轉送、即令修船護送、細在船主

〔世宗實録〕

還されました。これに対し、朝鮮国王は翌年使者を遣わして兼仲に礼物（回賜品）を与え、ここに周布氏の対朝鮮交易が開始されることとなったのです。

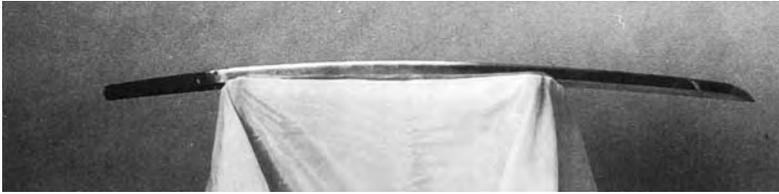
周布氏の対朝鮮交易は、図書を得て歳遣船定約（毎年、一定数の使者を派遣することを認めたもの）を結んだ文安2年（1447）を画期として前後2つの時期に区分されますが、一般には文亀2年（1502）までの78年間にわたって計49回の通交を行ったとされています。また、そこでの主な輸入品は紬・綿布などの繊維製品や虎皮・豹皮などの皮



現在の長浜港（浜田商港－平成5年撮影）

No.	年次	月日	発遣者	使人	出典
1	世宗7 (1425)	12月癸巳 (28日)	石見州長浜因幡守	石見州対馬島賜物管押使 大護軍李芸	『世宗実録』 卷30
	世宗8 (1426)	2月丙子 (12日)	朝鮮礼曹		『世宗実録』 卷31
2	世宗8 (1426)	11月丁巳 (28日)	石見州周布因幡刺史藤親心	書記景雅	『世宗実録』 卷34
3	世宗10 (1428)	8月乙巳 (26日)	石見州藤親心	人	『世宗実録』 卷41
4	世宗12 (1430)	9月壬戌 (24日)	石見州藤親心	人	『世宗実録』 卷49
5	世宗14 (1432)	12月丙申 (11日)	石見州藤親心	人	『世宗実録』 卷58
6	世宗19 (1437)	2月辛酉 (1日)	石見州藤親心	人	『世宗実録』 卷76
7	世宗20 (1438)	1月辛亥 (26日)	倭人藤親心	使送柏和尚等五人	『世宗実録』 卷80
8	世宗20 (1438)	6月戊寅 (26日)	石見州周布兼貞	道山等六人	『世宗実録』 卷81
9	世宗20 (1438)	7月戊戌 (16日)	周布兼貞	次郎左衛門	『世宗実録』 卷82
10	世宗20 (1438)	9月己丑 (8日)	石見州周布兼貞	三郎兵衛等二人	『世宗実録』 卷82
11	世宗21 (1439)	1月庚辰 (1日)	倭人石見州周布兼貞	僧道山	『世宗実録』 卷84
12	世宗21 (1439)	4月丁亥 (10日)	藤親心子兼貞	所預等三人	『世宗実録』 卷85
13	世宗21 (1439)	4月丁亥 (10日)	周布兼貞	延沙等二人	『世宗実録』 卷85
14	世宗21 (1439)	5月戊申 (1日)	周布兼貞	汝每仇羅等三人	『世宗実録』 卷85
15	世宗21 (1439)	11月壬子 (8日)	石見州布兼 (周布兼貞)	波古仇羅等八人	『世宗実録』 卷87
16	世宗28 (1446)	8月丁酉 (2日)	石見州周布和兼	人	『世宗実録』 卷113
17	世宗29 (1447)	5月戊午 (28日)	石見州周布因幡刺史藤兼貞	人	『世宗実録』 卷116
18	世宗29 (1447)		石見州因幡守藤原周布和兼	(図書・歳遣船定約)	『海東諸国紀』
19	文宗即位 (1450)	10月辛巳 (11日)	石見州周布和兼	要守	『文宗実録』 卷4
20	文宗元 (1451)	11月己亥 (5日)	石見州周布藤原和兼	而羅音波	『文宗実録』 卷10
21	端宗元 (1453)	6月辛卯 (6日)	石見州周布和兼	人	『魯山君日記』 卷6
22	端宗元 (1453)	7月丙辰 (1日)	石見州周布和兼	使者 (進香の記事)	『魯山君日記』 卷7
23	端宗3 (1455)	6月辛卯 (17日)	石見州藤原周布和兼	使者	『魯山君日記』 卷14
24	世祖元 (1455)	7月癸卯 (30日)	石見州藤原周布和兼	使	『世祖実録』 卷1
25	世祖7 (1461)	7月乙巳 (7日)	石見州藤氏周布和兼	人	『世祖実録』 卷25
26	世祖9 (1463)	7月丁未 (20日)	石見州藤原周布和兼	人	『世祖実録』 卷30
27	世祖10 (1464)	7月庚辰 (29日)	石見州藤原周布和兼	人	『世祖実録』 卷33
28	世祖11 (1465)	10月丁酉 (23日)	石見州藤原周布和兼	人	『世祖実録』 卷37
29	睿宗即位 (1468)	10月申辰 (18日)	石見州周布和兼	人	『睿宗実録』 卷1
30	成宗1 (1470)	7月癸卯 (27日)	石見州藤原周布左近将監和兼	人	『成宗実録』 卷6
31	成宗3 (1472)	3月甲寅 (18日)	石見州周布藤原和兼	人	『成宗実録』 卷16
32	成宗5 (1474)	10月乙巳 (23日)	石見州周布藤原和兼	人	『成宗実録』 卷48
33	成宗6 (1475)	10月癸未 (7日)	石見州藤原周布左近将監和兼	人	『成宗実録』 卷60
34	成宗8 (1477)	2月丙子 (7日)	石見州藤氏周布左近将監和兼	人	『成宗実録』 卷76
35	成宗8 (1477)	5月癸未 (17日)	石見州藤原周布左近将監和兼	人	『成宗実録』 卷80
36	成宗9 (1478)	7月丁丑 (18日)	石見州藤原周布左近将監和兼	人	『成宗実録』 卷94
37	成宗10 (1479)	6月丙申 (11日)	石見州藤原周布左近将監和兼	人	『成宗実録』 卷105
38	成宗13 (1482)	10月丙戌 (21日)	石見州藤原周布左近将監和兼	人	『成宗実録』 卷147
39	成宗15 (1484)	2月丙子 (20日)	石見州藤原周布左近将監和兼	人	『成宗実録』 卷163
40	成宗15 (1484)	12月甲戌 (21日)	石見州藤原周布左近将監和兼	人	『成宗実録』 卷173
41	成宗16 (1485)	12月癸巳 (16日)	石見州藤原周布左近将監和兼	人	『成宗実録』 卷186
42	成宗17 (1486)	12月丙戌 (15日)	石見州藤原周布左近将監和兼	人	『成宗実録』 卷198
43	成宗20 (1489)	3月丙寅 (8日)	石見州藤原周布左近将監和兼	人	『成宗実録』 卷226
44	成宗21 (1490)	3月戊午 (6日)	石見州藤原周布左近将監和兼	人	『成宗実録』 卷238
45	成宗21 (1490)	12月丁卯 (20日)	石見州藤原周布左近将監和兼	人	『成宗実録』 卷248
46	成宗23 (1492)	3月辛巳 (11日)	石見州藤原周布左近将監和兼	人	『成宗実録』 卷263
47	成宗24 (1493)	2月丙辰 (21日)	石見州藤原周布左近将監和兼	人	『成宗実録』 卷274
48	成宗25 (1494)	3月甲午 (5日)	石見州藤原周布左近将監和兼	人	『成宗実録』 卷288
49	燕山君5 (1499)	11月庚辰 (24日)	石見州藤原周布左近将監藤原朝臣和兼	人	『燕山君日記』 卷35
49	燕山君8 (1502)	8月甲寅 (15日)	石見州藤原周布左近将監藤原朝臣和兼	人	『燕山君日記』 卷45

周布氏の通交記事一覧 (関周一「中世山陰地域と朝鮮との交流」より転写)



貞綱作の長浜刀（安達美術館所蔵）

康正年間（1455～1456）の作で、「石州長浜住貞綱作」の銘がある。

刃長 67.9cm。（市指定文化財）

革類^{にんじん}と人参^{しょうし}・松子^{しょうし}・清蜜など、進上（輸出）品は刀剣^{しゅわん}・朱椀^{ろくしつ}・瀉漆^{ろくしつ}・
蠟燭^{ろうそく}と丹木^{たんぼく}・胡椒^{こしょう}などで、輸出品のうちの刀剣^{しゅわん}・朱椀^{ろくしつ}・瀉漆^{ろくしつ}・蠟燭^{ろうそく}などは、
いずれも長浜をはじめとするこの周辺地域で生産されたもの、丹木^{たんぼく}・
胡椒^{こしょう}などの南海産の物資は対馬での交易によったと考えられます。

この周布氏の対朝鮮交易にはいくつかの重要な問題が含まれていますが、中でもとくに重要だと考えられるのは次の3つです。まず第1に、偶然の機会から始まったとされるこの交易が、歴史的には決して偶然ではなく、必然的なものであったことです。ここでは、この点について詳しく述べる余裕がありませんが、その前提に鎌倉末・南北朝時代の倭寇^{わこう}（16世紀のそれと区別して、前期倭寇と呼ばれています）と呼ばれる、中国・朝鮮の沿岸部を襲った海賊集団の活発な活動があったこと、これに対し朝鮮国王が日本の特定の領主に公的な交易を承認することで非合法的な交易＝倭寇の活動を押さえ込むという政策を採ったこと、これが周布氏による対朝鮮交易成立の重要な歴史的條件

〔周布氏の通交途絶〕

【世宗十五年（一四三三）七月癸酉条】

視事、上曰、前比、倭客之来頗多、近者、何不如前、申商啓曰、九州兵乱、自相誅戰、故来往稀罕、上曰、昔者、本國使人往茂陵、遇風漂於倭國、倭國悉皆護恤而送、予忘之何島人也、商啓曰、石見州人也、上曰、其後相通乎、商對曰、其後、二度来本國、本國厚待而送、近来不来、盖因往来之險也、

『世宗実録』

〔周布兼貞の図書支給〕

【世宗二十九年（一四四七）五月戊午条】

日本石見州周布因幡刺史藤兼貞、遣人獻土物、仍請賜図書、從之、

『世宗実録』

〔周布和兼の図書支給〕

〔石見州〕

和兼（一四四七）

周布兼貞之子、丁卯年親来、受図書、稱石見州因幡守藤原周布和兼、約歲遣一船

『海東諸国記』〔日本国記〕（一四七二年成立）

〔和兼名義図書印と対馬の海商〕

天正十五年（一五八七）十月

十六日、晴、伊奈之商人下田左京袖銅印来、石州守和兼之印也、有日本朝鮮往復書稿、按朝鮮所録之日本紀石見州之部云、周布兼貞之子、丁卯年親来受圖書、々称石見州云々、印形方而長、印之字和兼之二字也、印材ノ上二三

已後義政亦爲石州守、連書朝鮮有稿

徳十二年五月トアリ、日本之文安年中乎、

『朝鮮国往還日記』

Ⅲ. 港湾都市・浜田と東アジア世界

(1) 港湾都市・浜田の成立と発展

西日本海水運が第2期から第3期へと移行するのは戦国時代のことです。15世紀中ごろ以後の戦国の争乱にともなって、武器や武具などの原料となる鉱物資源への需要が急激な高まりを見せ、そうした中で16世紀前半に石見銀山が開発され、これによって一挙に推進されたものでした。その特徴を一言でいうと、中世成立期以来のブロック状の水運構造が崩壊し、日本列島を1つに結ぶ水運と流通の構造が成立したこと、そしてそれは日本列島そのものを、中国を中心とした新しい東アジア世界秩序の中に巻き込む、世界的な規模での構造変化であったということです。

たたら製鉄などで知られているように、中国山地は豊かな鉱物資源に恵まれていましたから、戦国時代になると出雲・石見などの山陰地方は鉄・銅などの産地として大きな注目を集めます。これも一種の地域的な特産物に違いはないのですが、その圧倒的な需要の高まりと、地域的な制約とが重なることによって、それ以前の隔地間交易とは大きく様相が異なってきます。北陸・東北、あるいは南九州・畿内・山陽など、全国各地からはるばる鉄や銅を求めて多数の商人たちが直接山陰地方を訪れるという状況が生まれたのです。



ちゅうかいずへん
籌海図編 (国立公文書館所蔵)

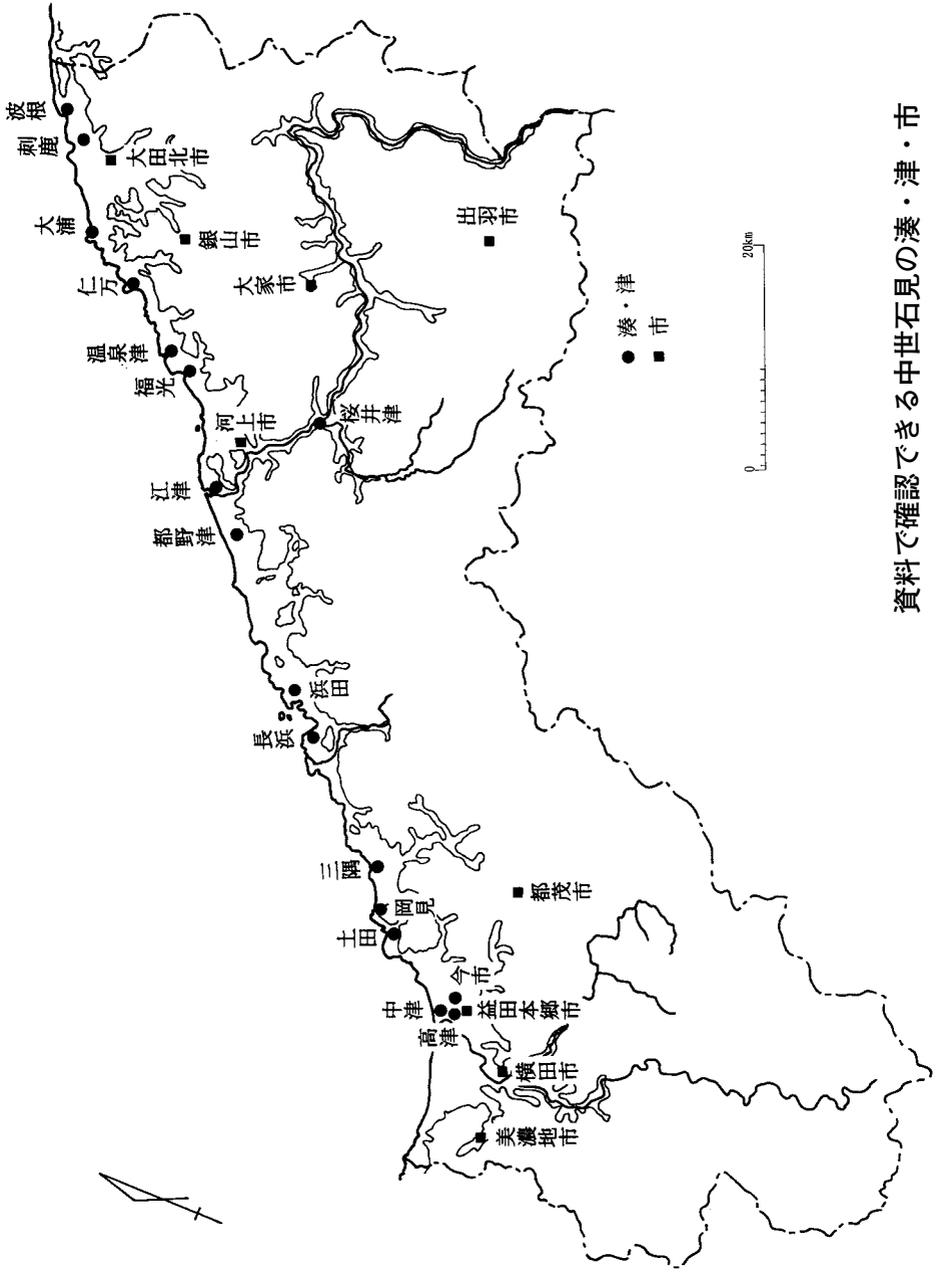
1562年頃に明の鄭若曾が倭寇対策のために記した日本研究書である。地図には「石見州領六郡」とし、哥（コー江津）、南高番馬（ナガハマー長浜）、番馬塔（ハマダー浜田）、撒奴市（ツノヅー都野津）、有奴市（ユノヅー温泉津）が記載されている。なお、「出雲州」に誤って含まれているが、この他に番備（ハネー波根）と山子家（サツカー刺鹿）がある。

そしてこうした大変賑わった状況の中で、日本海沿岸部の各地に港^{こう}湾都市^{わんとし}が成立してきます。現在確認できるところでは、温泉津や益田^{いまいち}今市などの市町の成立が16世紀初頭ないしそれ以前と考えられますから、少なくとも15世紀末・16世紀初頭ごろには各地に港湾都市が生まれていたと考えられます。浜田も同様であったと考えてよいでしょう。

中世の浜田の港がどこにあったのか。残念ながら、現在では必ずしも明らかではありません。可能性としては次の2つを考えることができ



現在の浜田港（浜田漁港と浜田川河口部＜平成5年撮影＞）



資料で確認できる中世石見の湊・津・市

るでしょう。その第1は現在の浜田港、かつて浜田浦と呼ばれていた外海です。これに対し第2は、西・北流して松原湾に注ぐ浜田川の下流部左岸、今日の港町から片庭町にかけての地域です。これらはともにその後「^{はまだはっちょう}浜田八町」と呼ばれた地域に当たり、前者がその外海側、そして後者がその東側の河口部ということになります。これらの地域は、ともに近世浜田藩の成立にともなう浜田（亀山）城の築城と城下^{じょうか}町整備によって昔の景観が失われてしまったものですが、中世の港が大きな川の河口部や内海に位置しているのが一般的であったことを考えると、後者の方の可能性が高いと推量されます。

そしてこの浜田も温泉津などと並ぶ石見地方を代表する港として、戦国時代には港湾都市へと成長を遂げ、大いに賑わったのです。薩摩国の島津家久が、天正3年（1575）京都に物見遊山^{ものみゆうざん}に出かけ、山陰經由で帰った時の様子を記した『中書家久公御上京日記』^{ちゅうしよいへひさぎみ}という記録から、その一端をうかがうことができます。

これによると、6月27日に温泉津から海路浜田に入った家久一行は、大賀次郎左衛門^{おおが}の家を宿として、7月10日まで10日余りここに滞在します。そしてその間、家久一行は連日のように酒宴を挙げて日を過ごしますが、その酒や肴^{さかな}を持ってくるのは薩摩国の加治木衆・鹿兒島衆・伊集院衆^{いじゅういん}・坊津衆^{ぼうのつ}や京泊まりの船頭などで（加治木衆や伊集院衆は銀山や温泉津にも出向いています）、南九州の薩摩から日常的に商人＝町衆^{おもむ}たちが浜田に赴いていた様子がうかがわれます。

〔島津家久の浜田逗留〕

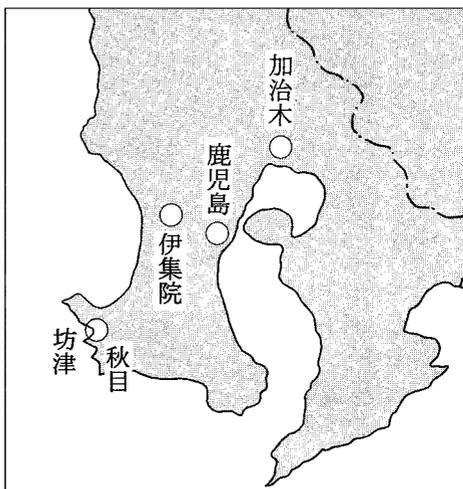
天正三年（一五七五）六月

- 一 廿七日、未刻に濱田といへる所に著、宿大賀次良左衛門、さて京泊りの舟頭、尾張樽持來り候、亦千兵衛樽、
(加) (舊木)
- 一 廿八日、舟侍、然は賀治木衆本佐野大炊介、樽・食籠持來り候、亦京泊り衆・秋目・とまり・鹿兒島衆など來て亂舞仕候、さて鹿兒島・伊集院衆より食調、晩にはしらは市介めし調儀候、
(白羽)
- 一 廿九日、秋目の舟頭將監、樽・食籠持來り、亦坊の衆にて藤十郎といへる者す、晩には東郷舟藏の明當右近兵衛めし調、さて濱田の町一見、
(坊津)
- 一 七月朔日、鹿兒島之町衆膳介食調候、
(ママ)
- 一 二日、秋目衆藏丞神祇介樽持來り、晩には大炊左衛門食をと、のへ、さて喜入舟の衆に酒たへさせ候、
(舊照)
- 一 三日、しらはの衆善左衛門樽・さかな持參り候、
(舊來)
- 一 四日、入木の權左衛門樽・食籠持來り、晩には鹿兒島町衆右近めしと、のへ候、
(舊左)
- 一 五日、右近兵衛魚など持來り候、
- 一 六日、市介さうめん・熟爪持來り候、
(瓜)
- 一 七日、亭主の親にて起といへる禪門、す、持參、其より舟に酒もたせ、舟頭にたへさせ候、各々酔に成て舞遊、其日をおくり、晩にかこしま町の者中村次良四郎樽・肴など、
(鹿兒島)
- 一 八日、秋目の舟頭魚など持來候、
- 一 九日、濱田の風呂へ舟にて行、かへりに京泊りの尾張といへる者、せと、いへる所に舟つなきしか、此舟二乗へきよし頻に申聞乗移、酒えんさまさまにて、亦とまりのこつく離候、
(瀬戸)
- 一 十日、申の刻に出舟、

〔中書家久公御上京日記〕（神道系・文学編所収）

また家久は、6月29日に「浜田の町」の見学に出かけ、7月9日には船で「浜田の風呂」に出かけています。風呂の所在は明らかではありませんが、帰りに瀬戸ヶ島^{せとがしま}に船を係留して酒宴を開いていますから、この近くにあったものと思われます。残念ながら、「浜田の町」の様子が記されていないため、その具体的な内容については明らかではありませんが、わざわざ見学に出かけ、ここに10日余りも滞在しているところから見ても、かなりの賑わいを示していたのは疑いないところと考えられます。後に「浜田八町」として整備される近世浜田の城下=商人町は、すでにその原型が戦国時代には出来上がっていたと考えられるのです。

この戦国時代の港湾都市浜田の様相を、いま少し具体的に考えるため、他の事例について見てみることにしましょう。参考とするのは温泉津の場合です。



上京日記にみえる鹿児島の商人たち



瀬戸ヶ島

〔小早川正平討死之事 (抜粋)〕

天文十二年(二五四三)

かくて、綱は石見の浜田に陣を取て、義隆朝臣の舟の着きけるを待て、それより防州山口へそ帰ける、

『陰徳太平記』 卷第十四

〔福屋陸兼及落事 (抜粋)〕

永祿五年(二五六二)

陸兼此儀に同じ、取る物も不_レ取_レ取_レ、夜中に城を忍出、浜田の湊、細越と云山へ取上りけり。

『陰徳太平記』 卷第三十四

〔諸国貫三毛利家付立花の城明け渡す事 (抜粋)〕

永祿十二年(二五六九)

石州迄上りけるが、折りしも浜田の浦に唐船来著すと聞て、此の地に四五日滞留し、遺物の宝器共を買ひ取り、悠々として在けるを、諸人怪しき綱寛が行_レ迹哉、

『陰徳太平記』 卷第四十三

〔吉川元春書状要〕

一、福屋方杵築まで被下候て彼表二被忍居之由、有方□内通候、此時者其表諸村備可付心事肝要候、油断候てハ不慮可有出来候へく候

一、浜田之町人、人質頼二差出馳走之由可然候、於其上茂可自心候、船出人候事能々可相究候、不可油断候、追々趣可由越候、吉事謹言

九月四日

元春 (在判)

安楽寺

森脇縫殿助殿

森脇一郎右衛門殿

境美作守殿

二宮左京亮殿

其外番衆中

(『吾国藩中諸家古文書纂』 森脇久大夫)

〔吉川元春書状〕

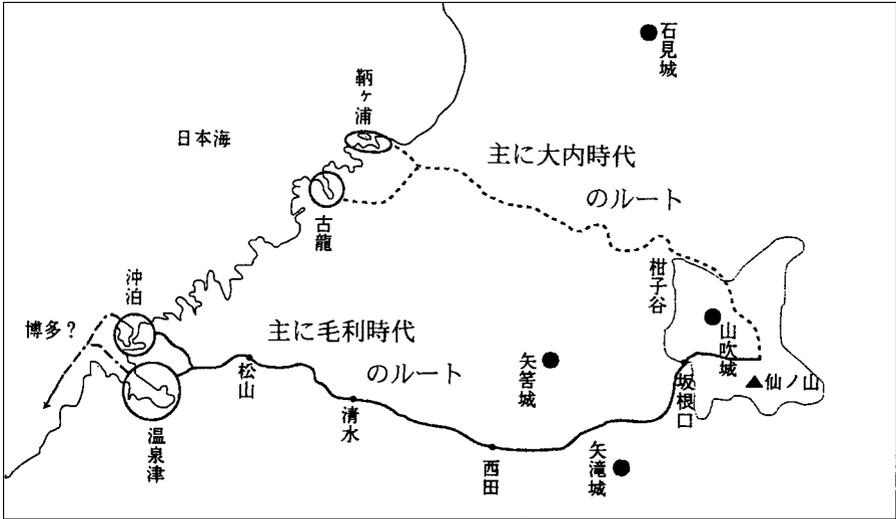
小石見村之儀元棟二進候、然者其方之儀、明日十六至浜田罷出、市浜田町人等理田聞、可相渡候、目元棟ハ山縣孫左衛門其外一兩人差出之由候、明日吉日可申候、謹言、

二月十五日

元春 公御判

山縣善右衛門尉殿

(『吾国藩中諸家古文書纂』 山縣彦兵衛)



石見銀山と湊 (鳥根県教育委員会『石見銀山』掲載図を修正・加筆)

温泉津は16世紀中ごろに戦国大名^{もうり}毛利氏が石見銀山の領有と合わせて直轄領とした港で、銀山街道^{ぎんざんかいどう}の窓口としても重視され、毛利氏は新しく温泉津奉行^{ゆのつぶぎょう}という役人を置いてこれを管理しました。しかし、温泉津自体は毛利氏が進出してくるより前の、15世紀末・16世紀初頭以前にはすでに港湾都市へと成長を遂げており、だからこそ毛利氏も温泉津奉行を設けるなどして、これを支配したのです。

この港湾都市温泉津の様相がある程度具体的にわかる史料として注目されるのは、天正15年(1587)の温泉津^{えこうじ}恵瑠寺旧記です。これは、九州に出陣していた豊臣秀吉のご機嫌をうかがうべく、日本海沿岸沿いに九州に向かった丹後田辺^{たなべ}の城主細川幽斎^{ゆうさい げんし}(玄旨)が、5月3日に温泉津を訪れた際の様子を記したものです。

この史料そのものの内容については『温泉津町誌』上巻（682～5ページ）を参照していただくこととし、ここではそこから分かるように重要な点だけを指摘しておくことといたします。

そのまず第1は、幽斎を迎えて、^{あぶらや}油屋（^{ただ}多田）^{みょうちん}妙珠・^こ松浦古庵・^{あん}蕨屋五郎左衛門・^{ならやそう}奈良屋宗仙以下20数名の人々が^{ほっけしゅう}法華宗寺院宝塔院（恵瑠寺）に集ま



恵瑠寺（温泉津町）



温泉津の町並みと恵瑠寺（高根県教育委員会『石見銀山』掲載図を修正・加筆）

り、百韻連歌^{ひゃくいんれんが}などをして歓談していることです。なぜこれが重要なのかというと、油屋妙珍以下の人々がいずれも温泉津市場の商人であって、法華宗の寺院に集まって百韻連歌を楽しむなどの文化サロンの集まりを持っているところからも、彼らが港湾都市温泉津の実質的な担い手^{まちしゅう}=町衆として、自治的に町の運営に携わっていたと考えられる

〔細川幽齋の日記〕

(天正十五年四月)

廿九日、石見の大浦といふ所に泊りて、明る朝、仁問といふ津まで行くに、石見の海の荒きといふ古事にもたがはず、白波かかる磯山の巖そばだちたるあたりを漕ぎ行くとして、

これやこの浮き世を巡る舟の道石見の海の荒き波風それよりやがて銀山へ越えて見るに、山吹といふ城、在所の上にあるを見て、

城の名もことわりなれや間歩よりも掘る銀を山吹にして宿りける慈恩寺、発句所望。庭前に楓のあるを見て、

深山木の中に夏をや若楓

湯の津まで出でて、宝塔院に宿りけるに、先年連歌の一卷見せられしことなど、かたみに申し出で侍りしに、五月三日、発句所望にて、その夜百韻を連ね侍り。

浪の露に笹島茂る磯辺かな

五日。出舟するに、跡にても一折張行すべきよしにて所望なれば、当座に、

浮き草の根に引かれゆく菖蒲かな

七日。浜田を出でて行くに、「高角といふ所なり」と言ふを舟より見やりて、「石見湯高角の松の木の間より浮き世の月を見果てつるかな」と人丸の詠ぜし事思ひ出でて、

移りゆく世々は経ぬれど朽ちもせぬ名こそ高角の松の言の葉とかくして長門国に至り、磯の上、鳥々を見渡して行くに、「借島といふ所あり」と聞くにも、世の常なきことを思ひ出でて、

みな人の命長門と頼めども世は借島の波のうたかた

おなじき国、浦小畑といふ湊に、唐船の着きてあるよしを舟人のうちに語りければ、さらば見物せんとて、遙かに船を寄せ、しばしとどめて、われもまた浦づたひして漕ぎとめぬ唐船の寄りし湊に阿胡の浦浪の高く聞えければ、

小鼓の胸に調べや合すらん打つ音高し阿胡の浦浪

『九州道の記』

からです。それは、一般にもよく知られている大坂堺おおさかさかいの会合衆えごうしゅうと基本的に同じ性格のものであったと考えて誤りないと思われます。第2に、こうした集まりがすでに大内義興よしおきの時代には存在していたとされてい、港湾都市温泉津の成立が義興の活躍した16世紀初頭よりも前に遡ることが確かめられるのです。

こうした状況は、石見に限らず出雲などでも同様に確認できる場所です。例えば宍道湖しんじこの斐伊川河口部ひいかわに発達した港湾都市平田ひらたでは、「平田衆」と呼ばれた町衆がその町づくりを担ったこともあって、その筆頭の平田屋佐渡守さどのかみは、のち毛利氏に請われて広島ちやうにんがしらの町人頭として、広島ちやうにんがしらの町づくりの中心となって活躍しています。

前節の終わりに、15世紀の後半から末期にかけて周布氏名義の対朝鮮交易を実質的に担う商人たちが登場すると述べたのは、こうした港湾都市やその担い手＝町衆の成立を踏まえてのことだったのです。恐らく、長浜もそうした港湾都市の1つとして発展していたと考えて誤りないでしょう。

ただここで同時に注目しておきたいと考えるのは、例えば出雲部において杵築きつきが出雲はもちろん山陰地方を代表する港として発展したように、石見部の港の中であって、浜田が温泉津と並ぶ最も中心的な位置を占めていたのではないかということです。そのことは、例えばさきに例として挙げた平田屋佐渡守が杵築に進出し、倉本くらもと（富裕な財力を持つ特権商人）としても活躍したように、島津家久が宿所とした大

賀氏が、実は三隅港^{みすみ}を拠点とする有力商人で、浜田の占める位置の重要性から浜田にも進出していたのではないかと推測されるところからも、これをうかがうことができます（浜田の大賀氏は三隅大賀氏の一
族であった可能性もあります）。そうした点からいえば、周布氏名義の対朝鮮交易というのも、実際には浜田の商人たちが深く関わってい



浜田城下町絵図 (1686 <貞享3>年以前の絵図 浜田市教育委員会所蔵)

た可能性が高いのではないのでしょうか。元和5年（1619）に入部した古田重治が浜田を拠点として選んだ背景に、戦国時代における港湾都市浜田の賑わいと、その占める位置の重要性が1つの大きな要因となっていたのは疑いないところであろうと推察されるのです。

ところで、周布氏の対朝鮮交易に関しては、いま1つ注意しておくべきことがあります。周布氏の対朝鮮交易そのものが、当初から対馬と朝鮮とのネットワークに支えられており、対馬は西日本海水運の重要な一角、対朝鮮交易の中継基地という位置を占めていたことです。

そしてこうした石見・山陰

地方と対馬との関係は、戦国期に至ってさらに緊密となりました。戦国の争乱にともなう瀬戸内地域海賊の活発な活動により、瀬戸内海の通航が危険で困難なものとなり、日本海水運の比重がそれまで以上に高まったためです。対馬と石見の商人が連携して周布氏名義の対朝鮮交易の実質を担うという体制は、こうし

〔石見と対馬盗賊〕

【成宗十二年（一四八一）十月癸丑条】

賊倭二十二人分乘二船、於全羅道地面不記名浦所、海探人抄掠奪弓矢・器皿・衣糧等物而來、不使本島人見之、潜往石見州、買売以為生業、此賊所居、則而那郡宗盛弘管下也、

〔成宗実録〕

〔貞享四年書上宗家判物写〕

吹拳一通、陸地・石見・若狭・高麗への大小船の公事、おふせんならひに志は判、船の賣口買口、人の賣口買口の事、扶持申所之状如件

（一四七四）

文明六 八月九日

塩津留主殿助殿

貞国御判

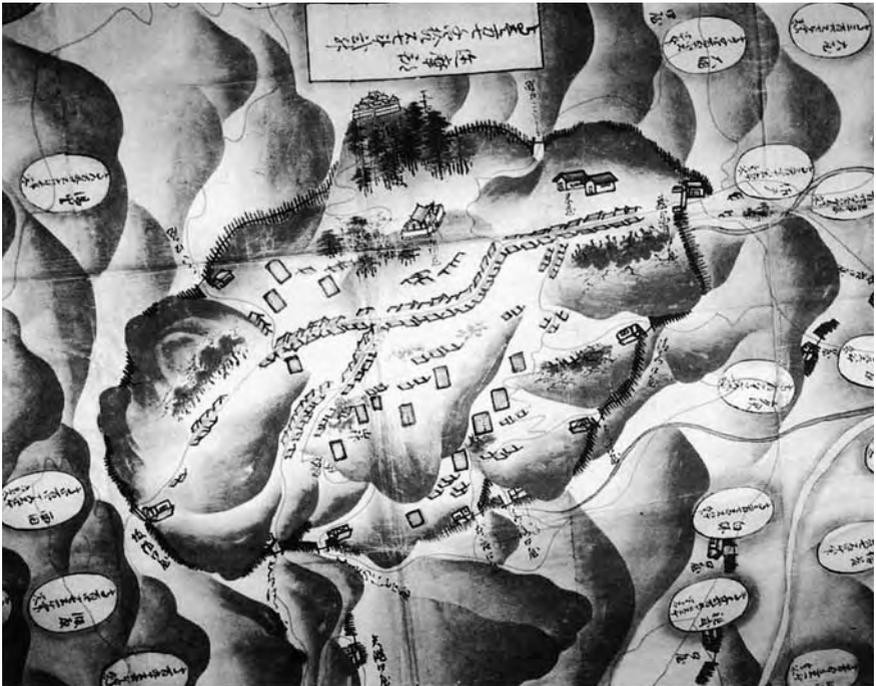
（対馬塩津留文書）

た状況の中で準備されたものでもあったのです。

文明6年（1474）8月に対馬の宗貞国そうさだくに しおづるが塩津留氏しおづるに与えた免許状の中で、その主要な取引先として「陸地（九州）・石見・若狭・高麗こうらい」が挙げられているのはその一端を示すものです。同じく、対馬宗盛弘もりひろ配下の海賊が、朝鮮全羅道ぜんらどうの浦々りやくだつで掠奪を行い、「潜ひそかに石見州いに往き、売買を以て生業」となしたと指摘されているのも、こうした状況の中で対馬と石見とを結ぶ日常的な交易ルートが定着・発展していったことを示すものといえるでしょう。港湾都市浜田などの成立・発展はこうした条件にも支えられて実現されたものだったのです。

(2) 石見銀山の開発と東アジア世界構造の転換

以上に見てきたような戦国時代における西日本海沿岸部の賑わいと、その前提としての鉱物資源に対する著しい需要の高まり。こうした状況の中で石見銀山は開発されました。16世紀前半のことです。博多の商人^{かみやじゅてい}神谷寿禎が、出雲田儀^{たぎ}の三島清右衛門が経営する杵築鷲銅山^{さぎ}の銅を買い付けに行く途中で見つけ、三島氏とともに開発に着手したと伝えられています。天文2年(1533)、大陸から伝えられた灰吹法^{はいふき}にもとづいて現地で銀が製錬されるようになり、生産量は一挙に拡



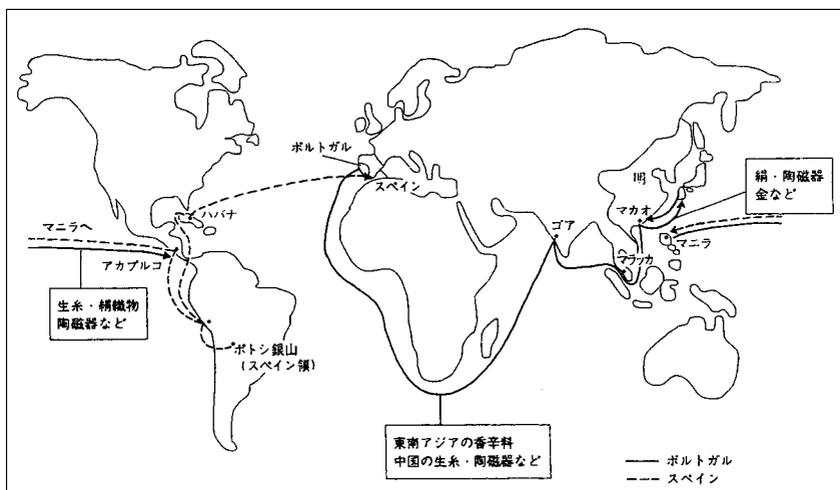
石見銀山 (紙本著色石見国絵図 浜田市教育委員会所蔵 - 県指定文化財)

大し、メキシコのポトシ鉱山に次ぐ世界第2位、東アジアでは最大の産出量（当時の世界の総生産量の約3分1に達したといえます）を誇る銀山として、一躍世界の注目を集めることとなりました。

この石見銀山が果たした役割の重要性という点でとくに注目されるのは次の2つです。まず第1は、この銀を求めて日本列島の各地はもちろん、中国・朝鮮やポルトガルを初めとする西ヨーロッパ人までが多数石見地方の沿岸部に押し寄せ、西日本海水運がかつてない賑わいを迎えたことです。さきに述べた港湾都市浜田や温泉津などの発展というのも、これによっていっそう増幅されたと考えられます。

第2は、この銀が主としてどこへ搬出されたのかに関わっています。石見銀山の銀は産出量の多さともに、ソーマ銀・サマ銀などの名称（これは中世の石見銀山が邇摩郡佐摩郷さまごうに属していた、その佐摩に因ちなむものと考えられています）で知られたように、その質の良さという点でも世界の注目を集めたところで、当時の世界の基準通貨として用いられたといわれます。こうしたことから、この銀は1つには「南蛮人」などの対アジア貿易の通貨として積極的に用いられました。彼らは、中国で購入した生糸きいと・絹織物などを載せて日本に來航し、これらの品物を銀（石州銀）に換えて東南アジアで香辛料を購入するという中継貿易を展開したのです。

しかし、いま1つ、銀の搬入先として最も重要な位置を占めたのは何といても中国、そしてその中心的な担い手として活躍したのは中



銀の流通からみた石見銀山と世界

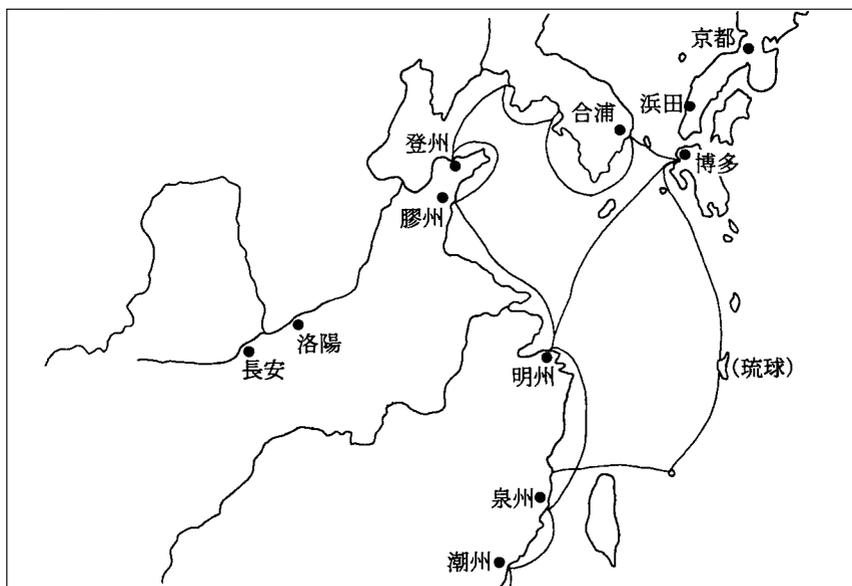
(鳥根県教育委員会『石見銀山』掲載図を修正・加筆)

国の密貿易商人たちでした。中国では商品・流通経済が大きく発展した1530年ころから、土地税と力役とを一本化して銀で納めさせる一いち条鞭法じょうべんぽうが採用され始め、40年ころから各地で実施されていました。この大量に必要とされる銀の需要に国内生産が追いつかず、これを海外から導入する必要が生まれたのです。石見銀山はまさにこの需要に応えるものであり、その中心を担ったのが中国の密貿易商人たちだったわけです。

この時代は、一般に南北朝時代に続く第2の倭寇（後期倭寇）の活動期として知られていますが、その実態は、これら中国の密貿易商人を中心に、日本や朝鮮などの人々が加わるというものでした。彼らは九州や日本海沿岸部などの各地に、今日も「唐人町」などの地名とし

て残されている拠点を設けるとともに、日本・中国・朝鮮などという国家の枠組みを越え、あるいはそれらを股にかけた活発な活動を展開したのです。

その結果、こうした日本列島の内外における活発な海上交通・流通経済活動を通じて、東アジア世界の構造そのものが大きく転換を遂げていくこととなりました。日本海及び東シナ海によって結ばれる15世紀の「環^{かん}シナ海地域」の交流は、一般に①対馬を媒介とする日朝間の多彩な交流、②琉球が展開した中国・日本・朝鮮・東南アジアを結ぶ中継貿易、及び③東シナ海を横断する日中間の外港・文化交流などによって支えられ、たいへん活発でしたが、しかしそれぞれの交流は

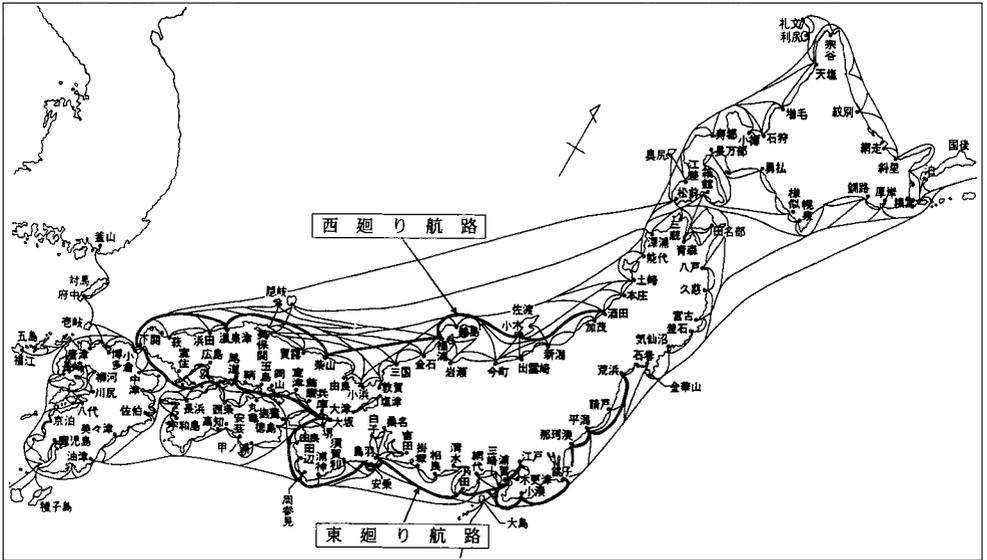


「環シナ海地域」と交易路

孤立性の強いものでした。それが、16世紀以後、それまでの国家間の関係を軸とする交流に代わって、中国商人を中心とする、非合法で多民族的な海上勢力が登場し、「環シナ海地域」の一体性を成熟させていったのです。

16世紀中ごろから17世紀にかけて展開されたこうした地域間交流のあり方は、「倭寇的状况」と呼ばれる多民族雑居を特徴としましたが、これをもたらした最大の要因の1つが石見銀山に始まる日本海沿岸部における相次ぐ銀山の開発（石見銀山の先進的な技術は、その後他の地域にも導入されて但馬の生野銀山や佐渡の鶴子銀山などを生み出しました）と、その銀を求めて日本を訪れる中国人を中心とする密貿易商人たちであり、そしていま1つがポルトガルをはじめとする西ヨーロッパ人の登場だったのです。西日本海水運の発展に支えられ、その中で「発見」された石見銀山は、その世界史的な重要性の故に西日本海水運そのものを飲み込みで、日本列島全体を中国大陸を中心とした貿易構造の中に巻き込むという、まったく思いもかけない結果をもたらすこととなったのです。

秀吉が行った文禄・慶長の役と呼ばれる2度にわたる朝鮮出兵は、新しく成立したこの東アジア世界秩序への暴力的な挑戦であると同時に、その失敗を経て、日本はいわゆる「鎖国」と呼ばれる閉鎖的な体制へと転換していくこととなりました。17世紀中ごろに整備された東廻り・西廻り航路の開通によって、文字通り日本列島は1つに結



近世後期の主な航路 (石井謙治『和船 I』掲載図を加筆)

ばれ、また河川交通を含め、水上交通は歴史上かつてない空前の発展を遂げることになりました（その構造は基本的には鉄道が開設される20世紀初頭まで維持されました）が、しかしそれは日本海を自由に雄飛した中世とは大きく異なり、国家権力（幕藩制国家）によって手足を縛られ、日本列島という「国家」の枠の中に閉じこめられた、新しい形での「古代への復帰」という側面も合わせ持っていたことを見落としてはならないと思います。

IV. 「世界の中の浜田」・「浜田の中の世界」

—むすびにかえて—

以上、この小論では、浜田地域を中心とする中世西日本海水運の概要とその歴史的な変遷過程について、たいへん大雑把な考察を進めてまいりました。いま、改めてその全体を振り返ってみると、そこには3つの重要な問題が含まれていることがわかります。最後に、この点について少し考えておくこととしましょう。

まず第1は、浜田地域の持つ歴史の重要性、あるいは浜田地域が歴史の中で果たした役割の重要性という問題です。これは、具体的には次の2つの内容からなっています。1つは、浜田を中心とする石見地方が中世西日本海水運の拠点としての重要な位置を占め、しかもその躍動的な歴史が日本の歴史全体の中の極めて重要な部分を占めているということです。言葉を換えていえば、西日本海水運やその中の拠点的な位置を占めた石見や浜田地域に対する理解を欠いては、日本の歴史そのものの正確な理解もまた困難となってしまう、石見や浜田地域の歴史はそれほどの重さと重要性を持っているということです。

そしていま1つは、古市・横路遺跡から周布氏の対朝鮮交易、そして港湾都市浜田の成立と発展というように、浜田地域の歴史の中に西日本海水運、あるいはその最も本質的で重要な部分の歴史が、いわば

これを凝縮した形で示されているということです。少々大げさな言い方をすれば、浜田地域の歴史が正確に理解できれば、日本歴史の最も本質的で重要な部分もまた理解することができる、浜田はそれだけ豊かな歴史に恵まれているということです。

しかし、このことは浜田地域をそれだけ他から切り離して捉えた^{とら}のでは、その歴史的な特徴や重要性もまた理解できなくなってしまうということを意味しています。これが第2の問題です。浜田地域の歴史は、浜田という狭い地域の中に止まらず、日本列島の内外や、東アジア世界の構造の歴史的な変化とも深く結び合った、その有機的な一環として展開したものであったと考えなければならないのです。そうであれば、浜田地域における個々の遺跡や歴史事象についての理解も、日本列島はもちろんのこと、中国・朝鮮などの東アジア諸地域と日本列島との交流を含む、世界的な規模でのトータルな歴史的視野の中で問題を捉えることがどうしても必要であって、それなしには問題の本質を正しく捉えることもできないということになります。

このことは実は浜田だけのことではなく、すべての地域に共通していえることなのですが、浜田の場合にはとくにそうした問題の捉え方が重要だということです。やや一般化していえば、①世界史的な視野に立って地域を捉えること、また②地域の視点に立って、日本や世界の歴史を捉え返すこと、この2つの視点を統一することが地域の歴史、浜田の歴史を捉えきるためにはどうしても必要だということです。

今日、さかんに国際化時代ということがいわれます。しかし歴史的に見れば、日本の歴史や日本列島各地の歴史そのものが、本来国際的な関係の中で築かれてきたものであって、そうした視角から自覚的に問題を捉え返すこと、そのことがいま改めて強く求められているということに他なりません。国際化時代に相応しい地域史認識、地域に根ざした主体的な国際認識の獲得に努めることが求められています。

第3の問題はこのことと深く関わっています。それは、日本の中世という時代が持っていた独自の豊かさ、豊かな歴史発展の可能性に改めて注目する必要があるということです。

古代の律令制や近世幕藩制以後と異なる、中世という時代の最も大きな特徴の1つは、地域の民衆や日本列島内の各地域が主体となって、積極的かつ自主的に国際的な交易・交流活動を展開していったことにあります。そしてそこでは、国家という枠組みが後方に退き、あるいは国家権力による規制や強制もほとんどなされませんでした。倭寇として恐れられた活動など、決して平和的な交流だけとはいえませんが、しかしそれも人間を奴隷として売買するというこの時代の持つ歴史的な限界というべきものであって、秀吉が行った朝鮮侵略や明治維新以後の日本帝国主義が行った中国・朝鮮へのアジア侵略などの国家権力を振りかざしたものは明確に区別される、本来平和的で相互の自主性を尊重した対等・平等な国際関係であったと評価できるものです。

日本海が国と民族を隔てる障害ではなく、地域と地域、そこに住む

民衆と民衆とを直接的に結びつける平和な内海として機能した中世、その時代が持っていた豊かな可能性を、もう一度批判的に検討し直してみることが必要なのではないのでしょうか。こうした点を含め、浜田における地域史研究と地域史理解がいつそう大きく前進することを強く期待いたしたいと考えます。

筆 者 紹 介

井 上 寛 司 (いのうえ ひろし)

1941 年京都府生まれ

大阪大学大学院文学研究科国史学専攻博士課程中退

島根大学法文学部教授を経て、現在、大阪工業大学教授
主に中世山陰地域史、中世神社史を研究

石見学ブックレット2

中世の港町・浜田

2001年3月31日

編 集 浜田市教育委員会

発 行 浜田市教育委員会
浜田市殿町1番地

印 刷 橋本印刷所
浜田市長浜町22-4

